前提の下に教授をし、又之が議論をもなし得るのである。斯くの如き見解の下に於て漢字は取扱はるべきものである。尙ほ更に小さい實際問題に這入つて來ると、云ふと其の漢字の中でも之を字音として言葉の中に使用して居る所謂字語を示せるものと、及び訓として日本語の中に使用して居る所の漢字の用法とがある。つまり字音と字訓との此の兩者があるが、此れも何れを必要とし、何れを必要でないとするやうな差別は無論出來ない。故に音訓の場合に於てその輕重の差を立てることは宜しくない。等しく國語を表はすに必要なる文字であると云ふことが必要である。之を若し言語の寫しかたと言ふ立場からすれば假名であらうと、文字であらうと、大した價値の上の差別はない。郵便と云へる國語の單語を假名でユウビンと四字で書かうと、漢字で之を二文字で書き表はさうと、何れにしても言語としての意味を他人に傳へる場合には同じ



同じ効力を有するのである。但し此れは口から耳に入れる場合の例である。言語と云へるものは、すべて人の口から耳に傳へるものである。決して目に見えるものでない。其目に見ることの出來ないと云ふ側に常に存するものである。若しも目に依つて言語を見ることが出來ると云ふ場合には、既に本統の意味に於ける言語の立場を離れて今度は文字と云へる要素をそこに加へなくてはならぬことになる。文字と云へる立場から言語を見る場合には、假名と漢字の間に自ら價値の差が生じて來る。是に於て假名論が起り、漢字論が起り、又羅馬字論が起つて來る次第である。目で目擊することの出來る研究は、之を普通に文章語と言つて口語體の言語とは區別して取扱はれて居る。文章語の中にも現代の活きた文章語と、古代に於ける死した言語との兩方がある。死した言語は之を古典と云へる學問の方面に包含させてしまつて、現代の達意的の

文とは自ら區別されて居る。漢字の價値を大きく見る場合には、此の死せる言語、即ち古典の方面の文章を讀むことが出來現代の文章語は無論のことであるし、總て此れ等を漢字に依つて表はす場合には漢字の智識を有する者に於ては非常なる便宜を得ると云ふ點で著しく漢字の價値を增大して來る譯になる。ところで此の文章語中に於ける漢字は文章其のものゝ中で假名よりも重大な役目を有するのであるからして、既に假名に對しては一層優勢の地位を占める筈である。

（四）單獨文字と結合文字

次きには漢字の用法そのものに就て更に考を凝らして見ると云ふと其の應用せらるゝ場合に、單獨に用ひられて居る場合と、二字又は三字、或はそれ以上結合されて表はれて來る場合との兩方がある。漢字の價値の輕重問題からすると此の兩樣の使用法に於て何れが重いかと言へば無論複合せられた熟語で表はるゝ場合の方が重いのである。固より此れは時と場合に依る、漢字はその單獨に用ひらるゝ場合が必ず輕いのではない。又複合されて用ひらるゝ場合が必ずしも重いに限つて居るのでもない。隨分複合して使用せられる場合にそのうち一字が間違つてゐてもそれでも尙ほ分ると云ふことが間々ある。それで價値論からすれば、敢て甲乙の差はないと云はなくてはならぬ。けれども、併し漢字使用の効力全體の上から言へば、どうしても自分は複合の方即ち熟語形成の場合の方を重いものと見る。從來自分の統計を取つた所に依つて見ると、日本現在の各般の記錄の上で文字が單獨に用ひられる場合と、結合されて用ひらるる場合とを調べて見た結果は次の通りである。

第一、漢字を單獨に用ひる場合。此れは個々の漢字中その普通有要なものを限り集めて見ると云ふと、大體五千を以て限りとして宜からう。

第二、漢字を複合して用ひたる場合。此の五千の漢字が種々樣々の結合をなし、二字語、三字語、四字語と云へる熟語を形成した其の結果、言語として表はれて居るものは約六萬五千乃至七萬ばかりある。其の詳細に就ては自分共の編纂した『漢和大辭典』の線章雙引の序文の處にその統計表が擧げてあるから、それに就いて見られると分る。

斯の如く約七萬の言葉に對して單獨に用ひられるものが僅に五千の數を出でないと云ふことであつて見ると云ふと、單に此の數の上から言つても一に對する十以上の價値が熟語の方にあると云ふことが分る。此れは尙ほ今後文明が進むに從ひ、漢字が此の世の中から捨てられない限りは、尙ほ益々增加しつゝ行くのであらう。現に飛行機の流行と共に種々なる新熟語が新聞に雜誌に、其の他軍事上の記事の上に表はれて來て居ると云ふことは世人も知つて居る通りである。斯くの如き譯であるから熟語の價値と云ふものは單獨の漢字の價値よりも餘程重く見なくてはならぬ。國定教科書に於ける漢字は二千六百有餘の單獨の漢字と、その他に統計は未だ取つて見ないけれども、之に對して約十倍の熟語があることと推定する。然らば其の熟語なるものゝ教授と云ふものは單獨の文字のそれよりも、一層の注意を以つて施すべきは言ふまでもないことである。

（五）單獨文字の教授法

斯樣に言つて來ると云ふと單獨の場合の漢字は、どう教授しても宜いものの如くに取られるかも知れぬ。併しながら此れ亦必ずしも輕々に看過すべきものではない。言ふまでもなく、縱ひ熟語が七萬の數に達してゐて而かも其要素たる必ず單獨の文字を以て組立てられてあるのであるから、單獨の文字に於て既に缺くる所があれば、恰も砂の上に築いた

樓閣の如き者である。即ち生徒の文字運用の智識の上に種々なる誤謬缺陥を惹起することになる。しかしのみならず或る漢字は單獨では決して使はれないで、熟語の上のみで表はるゝものがある。斯くの如きものにあつては、寧ろ熟語全體としての印象を明かにして、明確な解釋を以て生徒に教示しなければならぬことは無論である。單獨の文字を教授する場合には、然らば如何にして其の基礎的知識を授くべきか、此れは事小なるが如くにして決して小ではない。先づ單獨の文字を教ふる場合には、第一に形、次に音、次に意味、此三者を兼ね有しなくてはならぬ。筆順其の他文字の畧し方等のことはそれ程必要ではない。先づ基礎になるものは此の形音義の三者である此の三者の中に輕重の差があるかと云ふと、決してそれはない、此形音義の三者を有効に教ふるには目の力耳の力、口の力、手の力と云ふものを用ひて、最後に練習記憶の方法に依つて確實にしなくてはならぬ。併しながら之を記字せしむるには成るべく其の簡便にして有効なる方法を執るべきことは言ふまでもない。

### (六) 文字要素の注意

先づ其の形を最も有効に記字せしむる方法は、字畫の何れの部分にも精密に注意せしむると云ふことは却て生徒の記字を弱くせしむるばかりであつて、決して適當な方法とは言へない。自分の見る所では漢字の形を覺えさせるのには先づ必要なる部分を二つに別けて教へる、と申すのは、普通の漢字は何れも、字形が偏の部分と、旁の部分、或は冠の部分と脚の部分と云ふやうに分れる。さうして大體に於て、一方は意味のシルシであり、一方は音のシルシとなつて居る。それで何れの文字にも適用が出來ると云ふ譯でないけれども大體斯の如く二つの要素に別けられるものであるからして、其要素、其の單位の形を誤らせないやうにしなくて

はならぬ。單位となるべき要素の字畫を十分明確ならしむると云ふことに各敎員が十分の力を注がれむことを希望する。生徒に其の漢字構造の要素を明確に知らしむるには、同類の文字、又は同じ系統に屬する文字を羅列して其異同を知らしめ之を確實にしそして其の記字を確かむると云ふことが必要である。その列べかたに就いては同類、同形等の文字を縱に並べては左の部分の違つて居る點、右の部分の同一なる點を指摘してやり、或は之を横の列に並べては冠の部分の違つて居る點脚の部分の類似して居る點を指摘してやる。と云ふやうに縱横に幷べて見て其の異同を一々生徒に自覺せしむると云ふことが必要である。無論此れは生徒の頭に相當の字數を覺えた後に於て試むべきものである。十分個々の文字の貯へが出來て、然る後に蒐集分類を試むべきものである。實例を述べることは、爰に暫くよして置くからして各自任意に類例を集



められんことを希望する。

（七）字音に就いての見解

次に字音の記憶の方法。此れに就ては舊來漢音とか、吳音とか、唐音とか云へる種々の音があることを氣にして、頗る理窟に拘泥した覺え方をなす者があるけれども、それは今日の國語敎授法に於ては自分は取らない。音を專門に調べる場合には、無論斯くの如きことを述べる必要がある。けれども、師範敎育とか、或は兒童に向つての敎授と云ふやうな場合に斯樣なことを申し出すのは寧ろ無用である。それよりも平生普通の國語中に表はれて居る所の漢字音は寧ろ言葉通りの音として言語本位に字音を敎へることが必要である。社會の實際の慣例に從つて字音を敎へることになれば、漢音と吳音とを混同しようが、どうであらうが、そんなことは敢て問ふ所ではない。今日昭代の年號である『大正』の音ですら

も漢音、呉音の混同語であつて、これは讀みかたがよろしくないと一部の學者は非難してゐたけれども、漢音と呉音とを結合した言語を用ひてはいけないと云ふ理由は少しもない。元々漢音と云ひ、呉音と云ひ此れは唯々研究をする場合に混雜を來たさない爲めの便宜である。分類の名前にしか過ぎない。研究方法の上に立てた所の名稱を以つて事實行はれて居る所の活きた言葉をまでそれに依つて矯め直さうと云ふことは甚だ不合理な譯である。方法は所詮方法に過ぎないもので、生命のある活きた言語がそれに依つて束縛されると云ふことはあるまじきことである。

此の故に漢音、呉音等のことは全然拘泥する必要はない。尙ほ其の字音の問題に關聯して、字音假名遣のことがあるが、此れは從來は機械的に行くより他に方法がないとせられてゐた爲に非常に苦痛を感じて居つた譯であるけれども、此れは曾て自分の公にして置いた通り字音假名遣には六つ乃至は七つの法則があつて、其法則さへ辨へるときは、譯なく記憶が出來るのであるからして、此れは餘り大きな問題と見なくても宜からう。

一例を示せば、生がセイとなり、シャウとなり、丁がテイとなり、チャウとなり、命がメイとなり、ミャウとなる、斯の如く一方にセイ、テイ、メイがあり而して他方にシャウ、チャウ、ミャウと長音のあると云ふやうな場合には其の雙方の特色を數へ來たつて、一方にエイと云ふ共通點がつき、他方にはャウと云ふ共通音がつく。それ故此れは次のやうに記憶するが宜しい。語のエイなる者が長音になる場合には常に必ずャウを取ると云ふ其のャウの音を記憶すれば宜いのだ。此の方法さへ分れば、病氣の病はヘイの字の音符に依るのであるからして其のヘイに對してビャウと云

へるヤウの長音なることが直ぐ推量せられる。斯くの如き例はいくつ問題を提供せられても譯なく解決することが出來ると云ふやうに或る方法を以て字音假名遣を取扱ふ場合にはその覺えにくいと云ふことは左まで問題にならない。

尙ほ一般の字音を覺えるのは、此の漢字音相互の間に一つの系統とも云へるものがある。其の系統は文字構成要素の中の音符の音の系統に依つて類推して行くことが出來る。此のことも詳細は既に自分が公にしておいた所の『漢字音の系統』の中に詳しく說いてあるから爰には述べない。

## (八) 字義の記憶に就いての注意

次に文字の意味の方の記憶。此れは無論文章中に於ける時と場合に依つて、何れの文字も必ず同一形式を以て解釋されると決まつて居るの



ではない。前後の文の意味に依つて、それ〳〵變化があるのであるからして、此れは爰に抽象的に述べることは頗る困難であるが、凡そ其の文字の要素なるものは其の意味と形との間に聯絡のある者である。讀書の讀と云ひ、演說の說と云ひ、總べて口で言ふ場合には言偏がある。又熱と か煑るとかの如く、下部に連火の四點があつて火が關係して居ると云ふことも分る。斯樣に文字の一部に存する所の意味のシルシに依つて、其の文字の意義を聯想することが出來る。此れは同一音符に就て考へて見ても、其の音符の傍に存する意味のシルシ次第で、其の漢字の意味を推定し得ることが屢々ある。即ち治療、明瞭、遼遠の療、瞭、遼三字に於て、病氣の場合には病垂があり、目で見て明白と云へる場合には目偏があり、先きの遠いと云へる場合には辵があると云ふやうに、其の意味のシルシが違つて居ることに依つて、それ〳〵其の漢字特有の意義を推知し得ると云

ふやうに出來て居る漢字である。無論前に言つた通り各漢字は文章の前後の意味の關係で文字製作當時の本來の意味を表はし得ない場合があるからして、必ずしも此の筆法で以て全部推し通すと云ふことは無論出來ない。併しながら兒童に漢字を敎ふる場合には、少しなりとも斯くの如き手掛りがある場合には、之を興味を以て敎授すると云ふことを心懸けて居る敎室と、さう云ふことを心懸けて居ない敎室との間には、漢字智識の空氣が餘程そこに相違して來る譯である。

以上述べた所の字形、字音、字義、此の三者は單獨の漢字の場合に總べて應用せられるものである。單獨の漢字は熟語構成の場合の基礎になる。それであるからして、此の單獨漢字の敎授法を如何に試むべきかと云ふことは爰に述べた方法に依り更に各讀本の各課に表はるゝ新出漢字に就て場合々々に應じた敎授法を執らむことを希望する。



## (九) 結合文字の敎授法

次に熟語に表はれた漢字。此れは既に述べた通り、漢字其のものの價値論から言へば、單獨の場合よりも此の場合の方が重い譯であつて、重大な價値論を有して來ることになる。と申すのは總べて漢字と申すものは、單獨の場合の意味其のものは複合せられたものゝ場合も同じやうに表はるゝものではない。つまり甲と乙の漢字が結合せられて其の意味としては第三に別の丙の意味が出來ることである。例へば地理の上で熱帶と言へばその意味は、熱でもなく帶でもなく、第三の新意義なる熱帶といへる意味が生じて來る。又法律の上で法人と言へば、法でなく、人でなく、法律上やかましい別の意味である所の法人と云ふ新意義が生じて來る。期くの如く單獨の漢文が結合したと言つても必ず元の意味では用ひられないことが多いのである。からして、爰に其の熟語としての價

値が發揮せられて來るのである。固より又他の方面には如何に二字三字結合せられても、元の漢字の意味を全部又は幾部分なり傳へ來る所のものもある。教と室とが結合して教場の意となる如きそれである。何れにしても其熟語なるものの性質は、其結合の結果或る意味を生ずると云ふことが主眼である。そして、熟語の價値は此の結合と云ふことにあるのである。若し漢字にして結合せらるゝことが全然なく即ち熟語構成法がなかつたとしたなら無數の單獨の漢字を增加せしめなくてはならぬ理窟である。若し又單獨の漢字が實際增加し得るものとしたならば、西洋文明の這入つた此の五六十年このかた幾許の漢字が增殖せられても尙足らない譯である。

然るに事實に於ては明治以來の新字と云ふものは甚だ少い。さうして而かも新しい言葉と云へるものは漢字の結合に依つて無數に生じて來て居る。是れ即ち熟語が新思想、新意義を表現し得る特色を有つて居るからである。而して舊來の漢字を種々樣々に結合せしむることに依つて、文字新作の面倒を避け得たのである。熟語の性質が斯樣な譯であるからして、國定讀本に表はれた所の熟語を教授する場合に於ても先づ順序としては一字々々の字義を教授することも無論必要であるが、其結合の結果、第三の新しい意味を教授して、其の意味と或る程度まで聯絡のある解說を試み以て其の二字語ならば二字、三字語ならば三字の意味を十分明瞭ならしむるやうに努めなくてはならぬ。此の點が兎角十分でなかつたものと見えて、生徒の書く所の成績に依つて判斷して見ると云ふと、二字語、三字語の中には、其の中には誤字を多く書いて居る。此れは字畫の相違ならばまだ恕すべきであるが、さうでなく同音である所の他の文字を出鱈目に適用して居ることである。よく例に引かるゝ話であ

るが、前途有望と云へる場合にユウに勇の字を書き入れる『前途勇望』の如きは、抑々有望と云へる字の要素を明かに敎へて居なかつた結果と見る。熟語構成の要素を常に明かに敎へて、然る後に其の結果生ずる所の新しい意味を注入すると云ふ方法を執つて、それから先きは唯々それを反復練習することに依つて記憶を確實ならしめ、又時としては次のやうな方法を執ることも面白いと思ふ。即ち有望と云へる場合に、有の一字を殊更書かないで措き、さうしてそこに四角とか、三角のシルシをしておく。そして唯生徒銘々をして考慮せしめて、敎師は唯それに該當する發音のみをする。文字は生徒に筆で入れさせると云ふことをするのも面白いだらう。此の方法は西洋に於て文法の敎授の場合に前置詞とか、形容詞とか、冠詞などを挿入せしむる場合によく執る方法である。十分確實な知識を有つて居る者は即座に何等の懸念なく適當なる文字を入れることが出來るけれども、曖昧な考を有つて居つたり、又記憶の不十分であるものは、容易にそれに正字を書き込むことは出來ない。それ故に此の法方に依つて全體の生徒に向つて試驗をすると云ふことは熟語構成の要素を萬遍なく明確ならしむるに適當な方法であると自分は思ふ。此れは敎師自身各自更に考案せられたならば面白いことと思ふ。

以上述べた如く、漢字の中て單獨の場合と、結合の場合、と何れが重きやと云へる問題に對して、熟語の方が單獨のものよりも重い。故に熟語の方面に今後は主として力を盡されむことを望む。單獨の文字は單に基礎としての智識を注入することを以て足れりとなせば宜からうと思ふのである。無論此れで熟語對單獨文字の關係を述べ終つたと云ふ譯ではないけれども、大體此の趣意に依つて進むならば宜からう。また單獨の文字の場合に表はれない所の意味又は音が熟語の時にのみ現れて來

ることがある。以前に教へてない所のものが偶然出て來ることがある。それ故に到底單獨の場合に起り得る總ての場合を豫期して生徒に教へると云ふことは此れは無論不可能のことであるからして、要するに熟語の場合々々に應じて、此れ等は教へるより外には方法はない。行の字が行燈とか行在とか、行脚となる場合の『行』の音の如き、此れは殆ど一字の場合には表はれて來ないのである。かかる例からして略其の趣きが分るであらう。獨體文字及び熟語文字のことは此の位に止めて置かう。

## (十) 楷書及び草書の輕重問題

次に漢字の書體に就ての輕重問題に移つて少しく述べて見よう。漢字の書體は今日行はれて居る所では主もなるものが楷書と草書である。此二體を以て現行漢字の普通書體と言つても宜からう、而して行書なるものは、自分の見る所では、唯楷が草に移る過渡の狀態と見れば十分であると思ふ。それだからが冬の後夏來る中間に暫時春があるのと同じ譯である。その他書家其の他專門家の間では、隸書とか、篆書とか云へるものが用ひられ、看板とか、印形とか特殊の品物に此の書體が表はれるけれども、普通一般の實用的書體と云ふ中には入れることは出來ない。殊に普通教育と云へる場合に於ては此の骨董的の書體と云ふものは無論除外して考へなくてはならぬ。然らば普通の書體なる楷書と草書との中で何れが其の價値重きやと云ふ問題は、此れは非常に大きな問題である。時と場合に依つては草書の方が楷書よりも必要で、同時にその價値も大なることがある。言ふまでなく通信用の場合、其の外自家記憶の爲め手控の如きもの、其の外文學上の或るものにありては、草書でなくては到底容れられない場合が隨分ある。又或る方面のものは、楷書は殆ど必要がなくして、草書のみを使用して居ると云ふものもある。

併しながら少しく眼を廣く放つて、現代の大勢の上からして楷草の二體を批評して見るときには、無論誰人にもよくわかると云ふ點で楷書の方が價値の非常に優つれものと見なくてはならぬ。即ち草書を輕く見、楷書を重く見なくてはならぬ。此れは現在の世態に就て申すのであるが、今後十年二十年と徑つに從つて益々其の度を強くするばかりであらうと思ふ。具體的に言へば楷書が益々勢力を占めて、さうして草書なるものは次第に實用社會からして捨てられ忘れらて行くものであると思ふのである。今日の社會にあつては、まだ毛筆なるものに勢力があり事實ま行はれて居る。實際の商業取引其の他通信社會には老人又は老人に教育せられた者、或は直接老人から教育を受けなくとも、其の系統を逐うて手習をして居る者が隨分ある。此の故に今日に於ではまだ草書と云ふものは相當な勢力を有つて居る草書が讀めないやうではまた困る。





草書が分らないが爲に、非帶な利益を招くことがある。今より三十年又は四十年以前に溯つて見ると、當時の民間は殆ど楷書の智識はなくて、草書のみの漢字で用を辨じて居つたと云ふものがなか〳〵澤山あたつた。併しながら斯樣な人は今日では段々實際少くなつて來た。つまり明治の初年、或は明治以前に教育を受けた所の者が段々なくなつて行くに從つて、草書と云へるものが此の世間から勢力を失つて行きつゝあるものと自分は觀測する。一言にして云へば、草書は舊幕時代に行はれて居つた實用文字であつて、楷書は明治の後半以後乃至は大正以後に於ける實用普通文字の書體と言ふことが概括して申さるゝであらうと思ふ。今から四十年五十年と經つた後になつては、大正の教育を受けた者が世間に立つ次第である今日の教育は小學校に於て楷書を主として教へて居つて、兒童は殆ど楷書でなくては文字が書けないと云ふありさまである

卑近な例を申して見ても、近頃の少年青年の書く所の葉書などは、甚だ稀に草書を書くことがあつても、多くは四角張つた楷書で以て文章を綴つて居る。同時に候文が減じて來て口語體又は記事文體の通信に移つて居ることを見るのである。文章のことは爰で言ふ處でないから、それは省いて置く。草書の走り書のへりつゝあるとも面白い事實である。

（十一）楷書の優勢なる所以と草書の衰頽

斯樣に楷書の勢力が時代の進運と共に移つて行くと云ふことは、此れは如何なる理由に依るのであるかと申すと、想ふに此れは學校の教育の力と云ふことよりも、寧ろ又外に社會上の力即ち新聞なり雜誌なりの活字の字體が悉く楷書の明朝活字を用ひてあると云ふことに依つて支配せられて居るものであらうと思ふ。楷書が世界に流布すると云ふことは、最も合理的の現象である。なぜかと云ふと、楷書なるものが禮儀正しく几帳面な體を具へて居つて、何れの地方、何れの人に當嵌めても互によく理解されるべき性質のものである。然るに之に反して草書であると云ふと、頗る其の字畫がマチ〳〵になつて殆ど一定の規矩が存しないと言つても宜いやうな譯で「時に三水と言偏と、足偏とが共に同じい形に書かれ、又門の字と、鄕の字とは草書に於ては殆ど相似て居ると云ふやうな譯であつて、草書の智識の十分なものは左程の苦痛を感じないけれども斯くの如きことに此後の一般の人は多大の勞力と、時間をかけることは出來ない。當世の教育を受けた者にあつてはとにかく草書は頗る迷惑である。形こそは草書の字畫は簡單であるけれども、讀む上から言ふと厄介極まれるもので、厄介な文字に對して多大の苦心を要するよりも、字畫は面倒であつても、寧ろ早分りのする書體をとると云ふことが世の進運から言つても勿論至當なことで、斯くあるべきものであると思ふ。

書體の輕重論にあつては、今日の楷書全盛と云ふことは自分は非常に重大なことと思ふ。固より爰に述べた所の論は普通一般實用と云へる側から云ふのである。若し之を歷史の學問或は古文書學と云ふやうな側からすれば、楷書が盛になればなる程、其の反對の側に於て、學問として草書なるものを研究する、即ち古文書に讀み慣れ古文書の草書の研究なるものが爰に起つて來る必要があるであらうと思ふ。若しも今の調子で進んで行くと云ふと、楷書ばかり讀める者が多くなつて、德川の半ば頃の木版本さへももう讀めなくなり、從つて室町とか、鎌倉時代とか云ふ昔の武士の書いた尺牘などは一向に讀めないと云ふやうになつてしまふ。それ故に學問は學問として別に草書の方面を研究すると云ふことは無論宜しい。それから溯つては支那の六朝、隋、唐時代の草書を讀む學問も是亦必要な學問である。併しそれは學術と云ふ立場から云つて必要な譯である。實用方面から現代を主にして廣く議論をする場合にあつては、草書と云ふものが飽くまでも孤城落日の姿で、さうして楷書萬歲の聲を放たなくてはならないのである。それが大勢の趨く所であると信ずるのである。

（十二）漢字誤謬の特色の調査を忘るべからざること

最後に附加へて置きたいことは漢字の敎授に際して文字の正誤何れの調査が必要なるかと云ふ問題を論じて此の論文を終らうと思ふ。兎角敎室に於ける漢字の敎授法はその正しいことのみに調査が及んで、誤謬の方面の調査に一向及ばない。自分は正しく敎へる側の調査も無論重く見なくてはならぬけれども、之と同時に一方に於ては誤謬の方面の調査を十分に行ふ必要があると思ふ。つまり積極的に進むと同時に、消極的の方面からも進むと云ふやうにして、互に長短相補ふの方法を執ら

なくてはならぬ。進むことばかり知つて居つて退いて考へると云ふ方面の調査がない場合には其の實際に當嵌まつた教授法と云ふものが出來るものではない。それで四十人なり、又は五十人なり、其の他多くの生徒を取扱ふ場合には、其の生徒の爲す所の漢字の誤謬其のものには自ら或る理由が存して居る。此の理由たるや、若し正式の漢字の學問から殆ど取るに足りないと言つて價値のないものと見る人もあるが、自分はさうは見ない。

此れは心理學の上から言ふと頗る興味ある問題で、同時に又學術上の價値のある問題であると思ふ。誤謬其のものはいけないけれども、誤謬が如何にして表はれたか、如何なる動機に依つて斯くの如き誤謬をなしたかと云ふを其の心理現象に深く入つて考へて見ると云ふことが出來る。六歳の兒童のなした誤りの中にも非常なる學理上の眞理を含んで居ることがある。爰には敢て學術の問題を擔き出すのではないが、其の誤謬に陷つて居る文字を出來るだけ澤山集めて見て、其の間に心理學上の分類を試みて見ること。此れは其の誤謬の特色を發見して、其の誤謬に對する教師の注意と云ふものをそこに喚起することが出來る。各組を受持つて居る所の教師相互の間に其の誤謬を互に持合つてそこに誤謬を一つ大成した所の或る矯正方法と云ふやうなものが出來ると云ふと此れは甚だ興味のある問題である。同時に漢字の教授法を益々完全に近づけて行く所以であると考へる。從來教場で多數の答案を散漫に教師の方で朱筆で以て直してそれを戻すと云ふだけでは、それでは大した調べにならない。それを調べて綜合し、分類して、それに對する適當の方法を講ずると云ふことに依つて、そこで始めて誤謬の價値が表はるゝ譯である。地方に依つて茲に着眼をして其消極的の方面から漢字の教授法

を改良すると云ふ方法に出て居る所があるかも知れぬけれども、不幸にして自分はまだそれを耳にしない。此れは尙ほ師範學校なり中學校なり上の方面で適用しても頗る面白い譯であるけれども、差向き此小學兒童を對象にした此の誤謬の統計表、或は改良の方法を立つると云ふことは、目下の缺陷を埋める所の適當な方法である今日現に行はれて居る所の文字であつても、昔文字の出來初めの時代からして今日までには甚だ變遷に富んでさうして其變遷の間には隨分誤謬を多く出して居るものである。其の誤謬が三百年、五百年、千年と時代を經るに從つて最早誤謬として感じなくなる。花婿の婿と云へる文字は千年以前には士偏で書かれて居つたのが、今では全く女偏になつて居る男子であるべきものが女偏になつて居つて、而も我々普通之を怪しまないと云ふやうに其誤謬の因襲の久しき、最早之に正字としての資格がついてしまつたのである。



誤謬も或る時代の苦を生ずるに至ると正字としての價値がつくと云ふ事實に依つて見れば誤謬必ずしも擯斥すべきものでない。必ず此の誤謬の裏面には其の由つて生じた所の心理的現象と云ふものが伏在して居る。過去を想ひ現時の兒童のなす誤りを蒐集して其の間の心理現象を考察すると云ふことは、教師自身實際の教授に從事して居る傍ら、心理學研究の材料として取扱つてもなか〳〵興味のある問題である、直接教案、教授細目等のことには關係はないけれども、斯くの如き餘裕を文字矯正法と云ふ方面に用ひると云ふことは、頗る地味な仕事で花々しいことではないけれども、斯くの如き方面に興味を有つて調査せらるる方があるならば及ばずながら自分共もとも共に其の研究の歩を進めて行きたいと思ふ。

此れは附けたりに申したことであるが、自分の趣意とする所は前にも

述べた通り漢學を正式に教へると云ふ方法のみに離隙せずして、他面に於て此の誤謬の方面から生徒の漢字智識の缺陷の特色を指摘しこれに對する適當なる方法を立てそして現時の漢字教授法を一層滑かになし以て漢字全體の智識の進歩を圖ると云ふことにあるのである。

## (十三) 結論

以上漢字に就て述べた所の問題は、國語教授中で、語法文章法の一部分に屬するものとして述べたものである。國語の價値全體の上から申せば、漢字と云ふものは、これ程の値打を有たないものであるかも知れぬ。併しながら今日の實際より見て漢字の價値と云へるものは、非常に重大な關係を社會各般の者が有して居る。それ故に今日此の漢字を正確に修得して從來の如く長い年月をかけずして之を完全に運用し得る方法を立つることが若し出來たならば、大にしては國民義務教育の年限の問題にも關係して來ることと思ふ。從つて此れは國家の重大なる問題としても十分價値のあることであると思ふ。西洋に於ては三年多くも四年經てば普通の國語を操るだけのことは一通り出來ることになつて居る。ところが日本の六箇年の義務教育年限と云ふものは、自分は詳しくは知らないけれども、想ふに此の國語修得の實を擧げさせる爲に態々六年の年限があるのではないかと思ふ位に國語と云へるものが餘程困難なるものに數へられて居る。而かも其の國語の中で漢字なるものが最も厄介なものとせられて居ると云ふことであつて見れば、漢字の修得を容易ならしめ、其の困難なる部分を除き去ると云ふことは、實に國家問題として提供してもよろしいだのけ價値があると思ふ。

漢字は今日五千字日本に使はれて居るに拘らず、其の之を教授する方法に至つては、未だ能く方案が立つて居ない。唯々昔流儀と餘り變らな

い方法に於て授けられて居る。昔のやうに學問が簡單であり、教育は漢學の筋道で律せられてゐた時代ならばいざ知らず、今日及び今後の如き益、複雜の程度を加へ來る社會にありては、漢字の爲に呑氣な長い年限をかけて居ることは出來ぬ。勞力の上又時間の上の不經濟此の上もないことである。筆で書く所の漢字は段々印刷の方に引き移り、或はペン萬年筆等の文明式のもので最も書き易く又勞力の少いもの丶方へとのみ移りつゝあるのである。近くは漢字のタイプライターまでも出來るやうな時代のことであるからして、此の大勢に鑑み、漢字の教授法をも出來るだけ簡便になし、さうして其の從來の如き漢字は厄介なものであると云ふ方面の非難を少なくしたいと思ふ。一言して之を云へば、漢字の厄介と云ふことは漢字其ものが厄介なるにあらずして、教授の方法其の宜しきを得なかつた爲に、漢字の本體までが惡いもののやうに考へられて居たのである。之を專心其の方面の教授法の改良に身を委ね、其の困難を飽くまでも除かうとする者が出なかつたのは遺憾である。

以上に述べた趣意は斯くの如き譯であるからして、若し同趣味の方があらるゝならば、共に此の方面の調査研究に從事して一日も早く此の消極的、又積極的の方面から漢字の教授法改良、即ち從來の漢字修得難の原因を除去することに努めたいと思ふ。

# 二十九　文字の沿革

## (一)　象形文字より觀たる東洋古代の文明

東亞研究の機運が動いて來たやうであるが之が研究の方法には典籍よりするもの發掘品等の考古資料よりするもの日常社會生活の踏査よりするもの等種種あるが玆には象形文字を主なる材料として東洋古代文明の一班を探るの資としたい。

支那文字の數は五萬七千の多きに達してゐるが二千年前の漢代には九千五百餘しかなく古代になればなる程少くなつてゐる。殷や周には少數ではあるが尙數千を下つてゐない。而も其中には餘程元始的の俤を留めて象形當時の意匠を物語つてゐるものが多い。文字は社會的に生命を有し世を降るにつれて變遷發達を重ねて居る譯であるから、今日より二千五百年とか三千年とか但は夫以上の上古の文字に遡つて見る場合にはまだ變化を多く受けない比較的元始的な象形構造を窺ふことが出來るのである。此元始的狀態に在る文字は其文字構成の時代の社會を赤裸々に寫してゐる點に於て文獻よりも貴重な史料となることがある。此目的に適ふ文字資料は最近中央亞細亞ロプ湖畔出土の樓蘭國故地木簡などのうちには見出されない。さらばと云つて孔壁の竹簡も之を搜し出すことは出來ない。今日迄知られてゐる古文の材料は

(一)　河南省彰德府安陽河畔殷墟出土の龜甲獸骨遺片

(二)　殷周及び傳殷傳周等の古銅器類(山東省陳壽卿、北京武英殿、故端方日本住友男爵等所藏)

(三)　北京孔廟大成門內秦の石鼓十顆

などが其主たるものである。此等の材料は貴重なものに相違はないが

其總てを信ずることは出來ぬ。矢張りその中に其時代にも正體と俗體とがあり原形と略形とがあり其多く頻繁に使はれるものには勢ひ種々の慣用形が發達してゐたり、又地名人名の如き特殊のものには往々見當も附かぬ讀みにくい奇形が用ひられてゐることもある。此等は埃及の固有名詞の判讀され易く出來てゐるのと趣を異にしてゐる。兎も角も古代文明の研究に關鍵となる文字は殷周の字體である。支那では學者が『三代』と云ふ常套語を假りる習慣があり古代文字の方面にも『夏殷周』と云ふことを認めてゐるが夏の古銅器などは骨董としては許されても史料には認めにくい。殷と云ふことでさへも銅器の樣式模樣から批判する場合には多少研究の餘地があると思はれる位である。併し茲に注意すべきは此研究に採る文字が殷や周の、遺品の上に現はれてゐるからと云つて其構造の意匠が即ち殷や周の世態から直接採られてゐる如く速斷することは出來ない。こは殷代又はそれ以前の長い歴史を背景としてゐる社會各般の事物が知らず識らずの間に文字上に寫されるに至つたものと見るべきである。今若し皮相の見解で今日使用してゐる租の字、紙の字から類推して大正の世の税法は禾稻を貢ぎ、紙は糸屑より拵へられてゐた故、租に禾、紙に糸が夫々含まれてゐる等と解釋する者が現れたと假定せば甚だ迂遠なる誤解となるの一事に因つても文字は其使用時代以前の長き歴史を假定することの必要なことが判るであらう。

以上の見解にして誤りがないとすると、殷周時代と云ふ樣な三千年の古文字を假りて文明史を探ると云ふことは畢竟四千年五千年又は夫以上の古き文化の源流を說くことになる。時代の古さから云へば恰かもアッシリア、バビロニア乃至は古埃及の時代に相當することになる。西洋ではハムラビの法典やナイル河畔の文明の偉觀は歐洲諸學者によつ

て夙に研鑽され其の結果は大著述となつて現はれてゐるに反し、支那パレオグラフィの立場から支那文獻以前の黄河畔文明の偉觀の研究に就いては殆んど皆無である。幸にして支那の文字は象形文字であるから其研究法次第では前人未拓の荒野に向つて一大光明を放たせることが出來るのである。

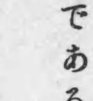
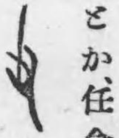
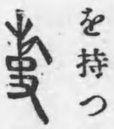
上古黄河の流域黄土質の沃野に五千年此方の文明の本を開いた民族が支那民族以外のものではなかつたらうかとは種種の點から推測せられるが當時既に文化史上、石器時代を脱却してゐたか否かの點は議論がある地質の關係にも因るであらうが石斧石礫の出土すると同時に玉器玉環の類も澤山發見せられる。而も象形文字の上から觀察せられる狀態は必ずしも所謂元始的の石器時代とばかりは見られない。今左に述べようとする象形文字は其造字の時代が銅器時代であると定めることは出來ぬが、さらばと云つて石器時代に許り見ることも出來ぬ。併し他の觀かたを採つて之を狩獵時代、遊牧時代農業時代及び工業商業と云ふ如き順序で經濟的に上古を見るときは其何れの時代の文字も象形の上に既に澤山現はれてゐるのである。して見ると支那は有史以前の傳說時代とも云ふべき時代並に其以前のアーケイックの世を併稱して假りに『文字時代』と云ふことが出來るであらう。そしてその時代に於ける支那文化は法律、政治、刑罰、軍事、宗教、工藝、風俗等各般にわたり孰れも相當の程度まで進歩してゐたものであることが文字によつて闡明せられるのである。今其一斑を示す爲に法制、建築、軍事の内より五六の例を採つて其要を述べて見よう。





## (二) 支那上古法制關係の文字

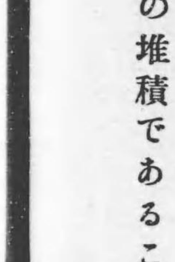
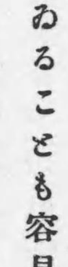
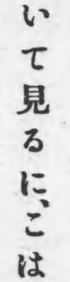
支那上古法制の觀念を示す象形文字の内で最も普通に現はれるもの

は『又』  （手）の字である。これは權力を把持するとか、任命された位置を保つとか云ふやうな場合に多く使はれる。『父』  の字『尹』 の字『君』  の字に於ける手は即ち何れも棒なり鞭なりを持つ手の義である。又『史』 の字は又とも書く。此等の手は任命のしるしを保有せる義である。手の外にまた口も屢々用ひられる。上述君の字に見られるやうに口は命令のしるしとなる。又『命』 の字の口の字の含まれてゐるのは廟堂に於いて命令の言葉を恭しく聽いてゐる意匠に成つてゐるのである。次に目も又屢用ひられる。多くは民衆、百姓の義に採るのである。例へば憲（法律）の字に於て古代には最初之を と書き周代の所謂魏象（法廷の掲示場）の如きものと之が側にその條文を見てゐる黎民の目（衆目）との兩要素に分解することが出來る如きその好例である。

次に支那人の法律の根本思想たるべき『法』の字の構造に就て之を分解して見ると茲に示すやうな古形で現れ四要素即ち（一）邪を避け、正しきを好む潔癖 の神獸と信じられてゐる解豸（二）公平を常に保つ水義と平等を主眼として法の觀念を作つてゐる點は比較法制史上興味ある問題である。

## （三）支那上古建築關係の文字

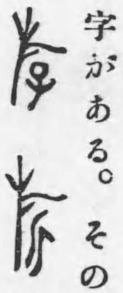
象形文字で支那上代の建築を說明するに足るべきものに就ては數年前拙著『文字の沿革』（建築篇）に述べておいた。がこの建築に因んだ象形文字は甚だ多い。その中に直接建築に關した意味の文字でその象形から起つてゐるものと、少しも建築に關した意味のない文字で而もその象形が建築から出てゐるものとの二者がある。

『戶』  の字が門柱と扉一枚とから成り門が左右の門柱と二枚の扉から成つてゐることは明了であるが更に『門』の字の構造がその門扉を閉ざした意味を示す爲めに横木の門に配せられたことを現はしてゐることも容易に想像せられる。又『開』  の字はそれに左右の兩手を配して此れでその横木を取り去らんとする意味を寓せしめたものであることが判る。次に門や戸を離れて一つの纏まつた建物を示せる文字に就いて述べると『舍』 の字の如きは、地あげをした堂の上にひろき幄舍式の建物のあることを示したもので中央に柱があり之に斜束があり四阿の屋根のあることも明白に納得せられる。更に『高』の  字に就いて見るに、こは城壁上の望樓その高きことを示した象形文字である。精密に象れば壁上女牆などもあるべく又その高臺が煉瓦の堆積であることを示す線もあつて然るべきである。その高の字に含まれたる口は今日萬里長城などへ行つて見ても判る如くその烽臺の蒙古に面した方でなく内側に面した方には必ずこの象形に見るやうな入口が構成されてゐる。朔北の樣子を探る爲めに戍兵などの此の入口より昇つて望樓又は女牆に出で得る狹路がついてゐて之に段が設けられてあるのである。その入口が即ち高の字の下部に示されてゐるものと解釋せられる。次に詩經などに建築に關した意味で用ひてある『向』 の字は東面、南面せる家の西の窓又は北の窓を指してゐるものでその字の輪廓は古形の示す如くもと家の破風側に象つたものである。

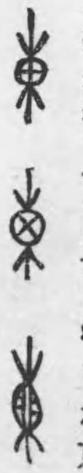
（四）支那上古軍事關係の文字

支那上古の軍事は文字の上に明白に辿られる。先づ『軍』『兵』兩字を見るに軍に車の字の含まれたるは上古の戰略か車戰本位であつたときの會意であることを示し、『兵』の字はもと斤(斧)を左右の手で把持するの象

である。即ち兵の字中に武器の含まれてゐることは爭はれぬ。更に武器で楯の字の原形盾に就いて見るに、盾はもと兵士が立つた楯を擁してゐる象である。支那上代の楯は象形文字の上には正面側面種々の描寫があるがこれは描寫法の都合で兵士は横向きであるが武器は正面に現はされてゐるのである。尙旗旂に因だものを擧げて見ると旂斿旅の諸字がある。その古形はこゝに示す如くその共通に見えるもの



が即ち旗の象形である旂は旗と斧との合字、斿は旗と旗手との合字、旅は旗と戍兵との合字、而してその旗は勿論軍旗である、旗斿その他武器には色々の形式のあつたことが大抵象形上に見られるが東の字東の字なども古くは茲に示す如き形で



見えてゐるからこは、朝の字戟の字などの左半の形と同じく上古の武器形から出てゐるものと云ふことは丈は斷定せられるのである。

以上は少數の例に過ぎぬが之によつてその象形がそれ〴〵今日傳はつてゐる文獻の到底達することの出來ぬ支那四五千年前の古文明を物語つてゐるものと見られる。從來象形文字の研究としては古くは後漢許愼の說文解字があり、近くは淸、王筠の說文釋例、劉心源の奇觚室吉金文述その他金石に關する著述は頗る多いがその各字の沿革を歸納的に調べて上代文化の各般を再現して古今の比較に及ぶと云ふことは今後の研究として全然手が着けられず殘されてゐる感がある。文字の沿革と云ふ範圍のひろい題目の下に收めらる可き研究の方面は啻に上述文明史の穿鑿に資することのみを以て能事となすのではない。字形、字音、字義等各文字其ものを對象とする所謂字學の研究なるものが更に別個の研究舞臺として存してゐることを忘れてはならぬ。要は文字の研究は新しい意味に於ける支那學の一重要部門をなすべきものであつて舊來

の如き骨董視さるべき性質のものでない。系統あり、目的ある一つの學問である。啻に又、古い歴史的の方面を調べる許りが文字調べの全部ではない。現代に於ける日用文字に關しても國として實際上の調査研究を遂げて置くべき問題が澤山眼前に横たはつてゐる。誰しも謂ふ國字問題のこともあれば又差向き必要な文字の亂脈を正して簡易に整理すること、活字を統一すること、標準字體を制定すること、敎育的の字體を國家が定むべきことこれ等は何れも職者の看過することの出來ぬ問題であると信ずる。

# 三十　漢字の研究と文字學の建設

## (一)　總論

文字とは何ぞ、形なき言語を標識に表はしたものの謂である。五千年前ナイル河畔に金字塔を建てた埃及人の歴史、及四千年前黄河に據て榮えて居た般人の俘、吾人坐ら能く之を今日偲び得るは一に全く文字の賜物に外ならぬ、文字が智識並びに思想上の文明傳達に貢獻多きは物質界に於ける諸交通機關以上である。古來文字は社會必須の要具、國利民福の增進上社會は常に之と離るべからざる關係を結んで居るけれども之を研究して一個の學術に仕上ぐるの機運には未だ到達して居なかつた。

然るに輓近諸般學術研究の進運殊に新興東亞研究の機運は哲學、史學、

文學等の外に、獨立した一個の「文字學」建設を促すに至つた。實にこは時代の要求である、東亞の文字は埃及文字やアッシリア文字の如き死字ではない、連綿古今を貫き現代文明とも交渉ある文字なれば此れを研究の對象とする文字學の建立を見るは東亞研究界の一大快事とせざるを得ぬ豈啻に學界の爲のみならんや、牽いては又實際社會のため賀すべきの至りである、吾人は文字學の建設に際し、斯學の範圍、任務、研究法等に就き期待すべき件々は甚だ多い。是迄での方面の研究幼稚なりしが故に解決の出來なかつた問題は少なくない。斯學の前途は多忙である。然らば文字學とは抑も如何なるものであるか、左に之に就き卑見を陳べ識者の叱正を仰ぐ事とする。



## (二) 文字學の定義

文字學の取り扱ふべき對象物は頗る廣汎である。又其の取り扱ふ方面に於ても種々樣々で、一樣にこれを律することは困難である。從つて文字研究に關する概念の範圍をきめて之に說明を與ふるは容易のことではないけれども文字研究の範圍任務、並に方法等の上より定義を下す時は比較的適當な概念の範疇を說明し得ることと信ずる、それによると。

『文字學とは文字を研究の對象となし、之を科學的に又は美術的に取り扱ふ所の一個の學である』

と定義することが出來る。文辭簡に過ぐ今その含蓄せる意味に就き下に一應說明を加へる。散漫に文字を研究して、文字上のことは何くれとなく知り極め、一見生字引の如く又は文字の倉庫の如く字の道にかけて該博であるといふ事丈が學問の能事ではない、眞の文字學は歸納的に、科學的に攻究せられて一定の秩序道理を簡明する事が重要である。之に

は分解、分類歸納の諸方法を要する。然し文字學は單にかゝる科學的の方法ばかりで攻究しつくされるものでない、もと文字は形而下の學で律せられる外に形而上のものとして取扱はるべき特質を具備して居る。汎義に文字を解する時は、分解的でなく綜合的に直覺的に見て批判すべき場合が屢々起つて來る。こは文字が美術に關聯する所がある故である。文字の形態、音韻のことを調べ又其の分岐系統變化のことを極め或はその過去に於ける研究の歴史を明にするはすでに科學的たることを要するけれども餘りに科學的の一方に偏して其の穿鑿に過ぎ、更に文字そのものを美的感情の方面より取り扱ふことを忘れる時は文字本質の一半を逸することになる。此の故に文字研究を一個の學とするためには兩方法を必要とする。而してその對象たるべき文字はこれを如何に説明すべきものであるか、詳細は後に述べるが茲には普通の意味に於ける文字は總て包含せらるべきものとなすのである。

### (三) 文字學の範圍

文字學が前節定義に示せる如きものであるとするならば、此の文字學の取り扱ふべき範圍領分は如何、凡そ何れの學問に於てもその學の主として取り扱つて居る領分がある勿論これは精密に決定することは不可能のことである。總ての學問は互に唇齒輔車の關係がある。從つて一を他から全然引き離す事は出來ぬ、時代の學風により、その領分の中心點は動搖して必ずしも一定して居らぬ。文字學の範圍も亦その例に漏れない。他の學の訓詁をなすを以て能事として居た事もあれば又文字の本流に逆る事のみを以つて文字學となして居た事もある。然しながら苟も學問といふ立脚地からすれば文字學の範圍として、

一、本質論　即ち文字とは如何なるものであるか。

二、狀態論　即ち文字は如何にあるか。
三、規範論　即ち文字は如何に在るべきものであるか。
四、研究史論　即ち文字は舊來如何に研究せられて居たか。
五、學術地位論　即ち文字學は他の諸學に對して如何なる地位を保つて居るか。

の諸項は動かすべからざるものである。畢竟文字學は文字そのものと、文字の取扱ひ方と、取り扱ふ結果他の學問に與ふる影響等に就き攻究調査する學である。かく説明すれば文字學は實際問題と沒交渉なる如く見ゆれども決して然るに非ず攻究調査した所のものは直接又は間接に實際生活と離るべからざる關係を有して居る。何となれば元來文字なるものは、實際社會の間に胚胎した共產物であつて社會を離れて存せしものは決して有り得ない譯である故かやうに推論せられる。今文字學の範圍を明瞭にするため上述の重要なる事項を簡單に説明して置かう。

### (イ) 文字本質論

**其の一**　これは文字研究の對照物を明示しておく必要上是非共、文字とは何かといふ基礎的概念を説明するものである日常目にふれて居る文字計りが文字である如く誤解せられてはならぬ。抑も文字とは如何なる實質より成立し如何なる要素に分けられ、又どういふ構造を有し、その起源は如何なる處から發して居るか、といふ如き何れも根本問題に逆つて其の本質をつきとめる事を眼目とする。これが文字の本質論として取り扱はるべき範圍である。されば文字とは苟も文字としての要素實質を具備せる限りは、總べて文字として取り扱はれる、必ずしも人々の手に成ると成らざるとは問ふ所に非ず。天然自然の間に文字同樣の典型を留め、之に文字としての資格の附せらるゝことさへあれば、それでも

文字である。

△(三稜形)のデルタの型が上古埃及ナイル河口の三稜洲に起因して遂に文字となり、因襲の久しき既に△はD字となりたるにせよ、デルタの型は今尚東西に文字として呼ばれて居るその他Z字形といひT字形といひB字形と云ひS字形と云ひ山形∧⋀といふ何れも文字或は準文字として取扱はれて居る、然れども我邦圖十組の一式として傳へられたる香組例へば

古の系圖香　桐壺　紅葉賀　若紫　葵　空蟬

(中略)　澪標　松風　朝顔　薄雲通計十五種

中古の源氏香　蓬木　空蟬　夕顔　若紫　末摘花　紅葉賀

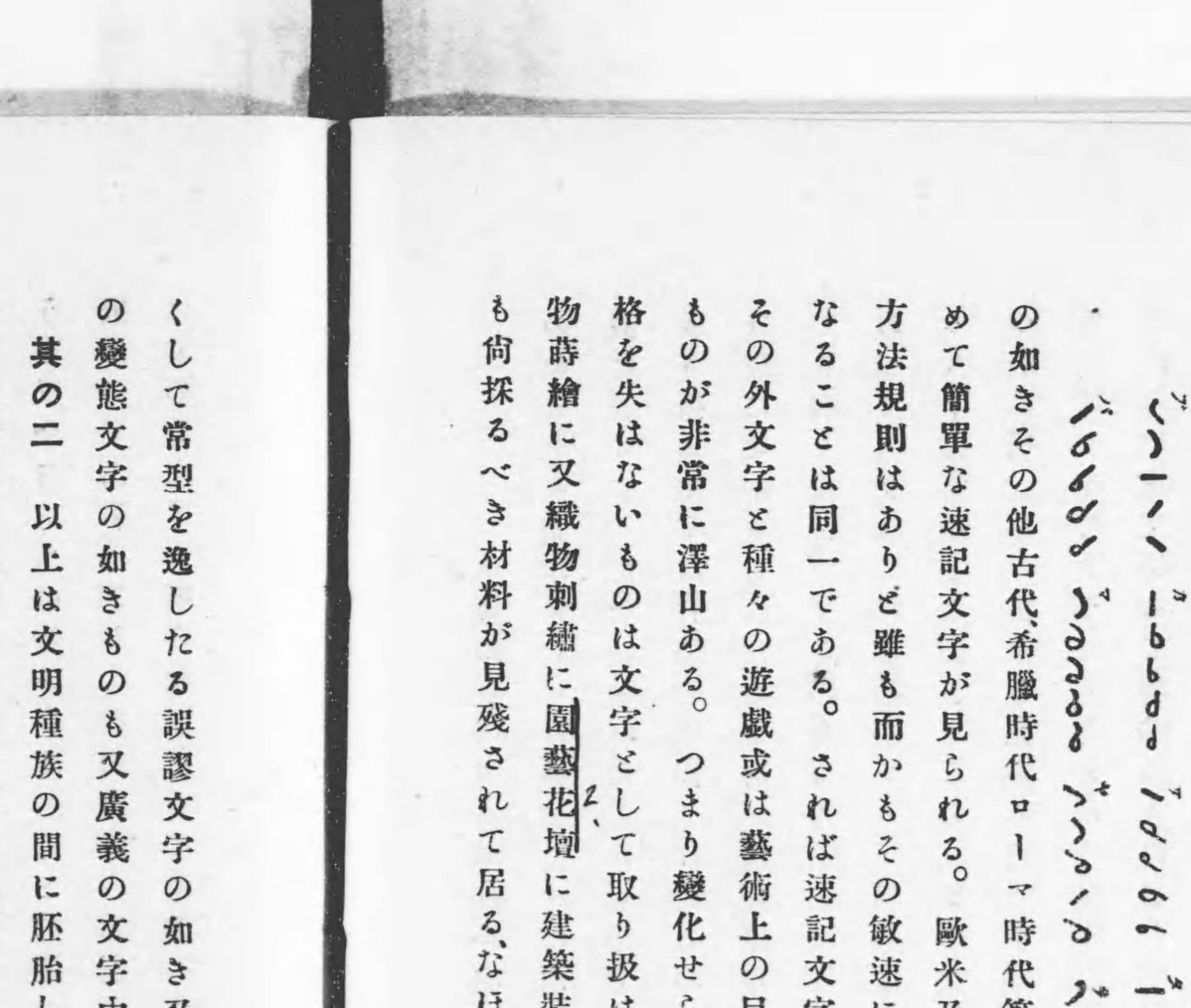
早蕨　宿木　東屋　蜻蛉　浮舟通計源氏香五十二



種源氏圖五十四種(今泉)

の如き之を文字として取扱ふことは出來ぬそは單に香を組み合せた記號に過ぎずして言語を標證したものでないからである。凡そ文字學で取り扱ふ文字は、言語の標識されたものを指すのであるからしてその今日現に使用せられたると否とは問はない全然死字に屬するものであつても取り扱ふ。又その今日の研究程度で未だ讀むことの出來ぬ文字であつても勿論これを是認する。例へば支那上古の龜卜文字中に見出さるゝ卜辭常用字の如きもその前後の文勢より或は他の類推歸納よりいつかは讀む事の出來る見込のある文字である。如何に尚專門に偏し又古代の文字であつても、その奇古特殊なるの故を以つて否認する事は許されない尚又極めて特殊のものとしては世に所謂速記用文字なるものがある。

日本速記文字一例



の如きその他古代、希臘時代ローマ時代等にもまた現時支那に於ても極めて簡單な速記文字が見られる。歐米及び日本のものには幾派幾流の方法規則はありど雖も而かもその敏速に書き得るやうに作られた文字なることは同一である。されば速記文字も亦文字の範圍内に這入る。その外文字と種々の遊戯或は藝術上の目的のために應用變化せられたものが非常に澤山ある。つまり變化せられても尚其の文字としての資格を失はないものは文字として取り扱はるべきものである、陶磁器に塗物蒔繪に又織物刺繍に園藝花壇に建築裝飾に應用せられたものゝ中にも尚採るべき材料が見殘されて居る、なほ又正體文字の範疇に這入るべ



くして常型を逸したる誤謬文字の如き又碑碣印章その他に往々見る所の變態文字の如きものも又廣義の文字中に入れて考ふべきものである。

**其の二**　以上は文明種族の間に胚胎した文字をあげたのであるが、尚未開種族の間に發生した文字も又、文字の一類たる事は爭はれぬ、文明人の文字中に特色とする所の要件は彼れ等の文字に要求せられない事がある、これと同時に彼れ等の文字には又一種他に見出し得ない特色を備へて居る事を見る。文字研究の立場よりすれば決して其の民族の文明程度の如何を標準として文字の本質を上下する事は許されない。文字心理の研究上には蠻人の一文字現象よく千金の價を現出する事なきを保し難し、未開半開種族の文字も文字としての資格に該當せるものは悉く採つて以つて文字學研究の對照となすに足る。尚又文字の繁簡の如何が文字としての資格を決定する上に問題となる樣に考へるものがあ

るが決してそういふ事はない。文明人の文字にも支那文字や埃及文字の如き隨分繁雜な形を有して居るものもあれば又東西速記用文字の如き最簡のものもある。未開人の文字にしても、アフリカ、アルゼリア又はブッシュマンの文字の如き複雜な字形の者もあれば支那苗族の字の樣な簡單なものもある。それ故文字は必しもその複雜な事の爲に繪畫であると評したり又その簡單である爲に記號に過ぎぬといふ論斷を下したりは出來ぬ。文字本質論よりすればその繁簡の問題は論じないのである。それ故に凡そ文字は無形なる言語を有形のものに標識したものであるならばその如何なる種族の間に生じたもので難易が如何であらうと又今日直ちに讀み得ると否とに關せず凡てこれを文字として取り扱ふのである。而して其の文字の本質要素構造を研究し出來得る限りは其の由來する所の起源にまでも遡つてその系統を確實にする必要もある。要するに第一の文字の性質本質論では文字そのものゝ實質上の調査をなし文字研究上の基礎的方面を明かにするのである。

（ロ）文字狀態論

**其の一**　これは前條の文字とは如何なるものなりやとの概念の範圍につき説明するものに非ずして文字は如何にあるか即ち如何なる狀態にあらはれて居るかといふ現象の觀察調査につき説明をなすものである、それ故に本質論にはふれないけれども其の文字の外形は時代により、地方により種々變化をなし分岐發達を重ねて幾種類かに分れ又地理的に分布されて行くものである、近くは支那の文字が支那本土を中心として古來二千年の間に或は南して安南に入り、或は東して日本朝鮮に入り或は北して女眞西夏に入りそれ〴〵特有の地方的文字を胚胎せしめて居る如き又遠くは、印度の梵字が古來分岐に分岐を重ねてボンベイ、ベン

ガルにシンハリーズ、セイロンに、タミル、テルグにビルマ、シャムに朝鮮に又ネポール、チベット、モーコ滿州に各地特有の同系異種文字を發達せしめたる如きあり。或は又古のヒブリウ文字が後世シリア、アラビア或は東西に分れて一はペルシア、マレイ、カシミアに、他は埃及、トルコにそれ〴〵かはつて現はれて居る如きこれなり更らにヒブリウ文字の根本起源なる埃及文字は古來五千年の間にヒエラテイック、セム、グリーキ、ゴート、ロシア、ラテンの諸重要文字を胚胎せしめて居る。文字形態の種類及び其の分布は文字狀態論中最も興味ある問題である。殊に其の間の系統を明かにし分類を試むるは文字學の取り扱ふ事項中にても最も緊要事項中の一である。左に各國文字の一例を示して一斑を推測するに便せしめて置く。

要するに文字狀態論としては各國各種の文字を個々別々のものとして記述する事の外に生成の順序形態の系統を闡明し以つて分布の徑路を明かにすることを要す。然しながら此くの如き研究には順序として先づ個々の民族の文字を逐一攷覈する必要がある。又單に字面の類似のみに信賴する事の危險な場合も生じて來る。種々の學問の補助智識に據り最も穩健な研究法をとるが肝腎である、個々の研究をなるたけ多くなしとげて得た所の結果はこれを全體としての研究と互に相てらし合ひ而して文字狀態の眞相を明かにする事につとめねばならぬ。然るに文字狀態の研究は單に字面の調査字形の比較分類をなす事のみにて能事つきたるに非ず前に字の本質論の處にも述べたる如く文字は言語の表彰として標識せなれたるものなれば、尙音の方面の事も共に忽にしてはならぬ字音の狀態の研究はその言語を明かにするに非ざれば輕々しく着手すべきに非ずと雖も、その方面の重要なる事は說明を要する迄

もない。殊にもし其の文字が全然音標文字である時には其の字音を確めずして試みたる研究は水泡に歸する事がある。何となれば文字にして音の明かでないものは音なき記號と撰ぶ所なく音なき記號は言語上の標識に非ざれば文字としての資格なきものたればなり。それ故文字の狀態とくらぶるには常に文字の本質を損する事なく飽くまでも文字は文字としての眞相を明かにするを以て綱領となすのである。

**其の二**　尙學術方面の外に實際方面に於ても文字狀態につき調ぶべき事項は甚だ多い。文字は美術工藝品などに應用せられた時如何に表はれて居るか又文字が歌に詠込まれた時又は人名地名物名などにつかはれた時の訓讀は如何に表はれて居るか又文字傳說中に表はれた時はどういふ思想にとられて居るとか、或は今一層重大な問題になると文字敎育の上に文字の現狀は如何に表はれ如何なる缺點と長所とか存して居るか國家社會の立場からそれをどう處置すればよろしいかといふ如き問題又印刷上に文字は如何なる特色を以て表はれて居るかなどの興味ある研究調査事項がある。要するに狀態研究は始終狀態の研究だけであつて毫も文字の根本的基礎にまでは觸れないのである。尙又文字が實際社會に認められて其の如何なる範圍まで利用せられ、又如何なる程度まで貢獻して居るかといふ方面の事も此の狀態論の內にて調べらるべきものである。

## (八)　規範論

**其の一**　これは文字の規範を示すもので即ち文字の基礎及び狀態の事がわかればこれによつて文字とは如何なるべきものであるかとのノルムが歸納せられる。文字存續の理法方針といふものは文字の性狀を明かにし之に時勢の推移を、參酌する事によつて、推測が出來る。又文字

の理法は過去の歴史を以つて、或る程度まで類推する事が出來る、けれども因果關係を以つて絶對的に推斷する事は出來ぬ、これは文字の存する社會に從前と非常に異なる變動の生じた場合には、必ずしも過去を以て律しられない事があるからである。社會の他の總べての事情が類似せる場合に於てのみそれが成立し得といへる。然し乍ら、そは嚴密にいふ場合の事で多くは同一の文字は過去の傾向をくりかへすものである。また地方的に分布せらるゝ事あるも、異形の內に同一の點或は近似の點を、保存し一見他の種類の文字とは區別せられる點がある。支那系文字にせよ印度系文字にせよ又ヒブリウ系の文字にせよその末派の文字に至るまで一定の型を其共通に保存して居る。殊に支那の文字に明かに指摘せられる如く文字に新陳代謝があり難易兩字互に出入ありといへども難字は漸次簡易文字に其位置を奪ひさらるゝ傾向が見える。活字印刷の事ありて以來この傾向は、往々さまたげられたる點なきに非ざるも手紙類の文字に於ては明かに去難就易の理法に支配せられつゝある傾向は誰人と雖もこばむ事は出來ぬ事實である。

字形に於て一樣の傾向がみとめられる如ノ字音に於ても音韻の發達の順序により古今の間に著じるしき差異がある。のみならず同じ事が地方的の音の差としても見出だされる、斯樣に形又は音を歸納的に攻究しその影響する處が大なるにせよ小なるにせよ之を一個の動かすべからざる法則となす事が出來るならば之を以つて一個のノルムとなす事が出來る。之によつて他を類推する事は暫く別の問題とするも兎も角その文字の性狀と密接な關係ある法則として假定する事は無稽の事でない。文字學の取り扱ふ事項の一として此の方面の研究は又見逃がすべからざる點である。つまり文字の規範論は文字現在の間に存する法

則の科學的追求にして新しい意味に於ける文字研究の全體に亘り系統的秩序即ち體系を提供する所以である。文字學はその方面の研究を包含する事によりて一個の學としての秩序形式を具備することが出來るのである。舊來文字の研究殊に支那の文字研究が僅に詩韻と部首を永久の綱領として進みたる外何等殆ど秩序體系の見るべきなきに對し、此の規範論の攻究は今日文字學上必須の研究事項としなくてはならぬ、由來支那方面の學問はその材料の蒐集は常に驚く可き數量に達し從つてそれに要せられたる勞力も亦驚嘆の外ないけれども其秩序體系に於て缺くる所あるは索引學に着眼する識者の常に遺憾となす所である。

**其の二**　新興の文字學建設に當つて此規範論をその範圍内に入れた所以は蓋し偶然ではない。啻に學術上の問題ばかりでなく、又實際問題として大いに關係がある、日本及び支那の國字問題の如きまた書道問題の如き二十世紀の時勢と國狀とに鑑み多少舊態を改善するかどうするかと云ふ目下の急勢に對しても此規範論は好き準繩たる可きものである。或は又過渡時代なる日本現時の漢字の整理は如何になさる可きかの問題に對しても之を根本的に試みんとするには文字學上の規範に俟たなくてはならぬ、規範論の影響する所はかくの如く深く且つ甚大である。これ文字學として取り扱ふ範圍の一大部分を形成する所以である。

## (三)　研究史論

**其の一**　これは古來文字學者は又他の學者が文字に就いて攻究調査せし歷史を明にすることを眼目とする。即ち如何なる材料を如何なる方法で以つて研究して居たか。いつの時代に何と云ふ學者が出て文字研究に從事して居たか。その結果は何と云ふ著述で遺されて居るか。

又その門弟子學派はその傳流を如來に續けたか。その研究の結果はどうであつたか。と云ふ如きすべて舊來の文字研究の歴史に就いてしらべるのである。一言で云へば文字學史の研究である。文字學史はいふまでもなくその學の歴史であつて文字そのものゝ歴史即ち文字史とは別である。言語學史と言語史とが全く別なる如く文字學史と文字史とは混同すべからざるものである。而して、文字史と云ふものは、太古には元始時代から始まるを普通とすれども、文字學史は更に時代が餘程後れる。之は學問の發生の理より見るも當然しかるべき事である東アジアに於ても文字は既に四千年以前からあつたから文字の歴史はその邊から始まる。然し文字學史の出發點はよほど世を降つて、秦漢當時のところに在るといふやうな譯である。

研究史論の内で取り扱ふべき事多き内にも最も緊要な研究事項は從來の學者がなしたる研究の苦心を多としその研究方面の眞相を見之と同時にその研究の程度が如何なる範圍程度まで進んで居たかをつき止める事である。たとへば支那の文字研究で從來學者は個々の場合の研究を主にして居るのみで其理論の方面に入らない。又文字起源の根本問題にも觸れて居ない、又音と形の兩者を合せ研究するの分野を開かない。上古の文字を理想とするのみで比較文字學の方面に着眼をして居ない。又文字美術の方面は古來餘程開けてゐるにも係らず之を學術的には研究して居ない、又字の形音に存する處の變體なる物は一も二もなく之を卑俗誤謬視し甚だしきは極力之を排除せむとするばかりであつて、之れに依つて別に一個の變態文字學なる研究の出來る事に目を着けぬ。舊來の研究範圍は實に說文學の範圍に跼蹐して自山研究の天地を開いて居ない。もとより金石文の研究なきに非らざるも其着眼の範圍

は甚だ狹い恨みがある。又研究の對象が多く古代を主とする傾きのある爲時代を追うて變遷を見るといふ樣な研究は甚だ乏しい。それ故舊來學者の理想として居た古代研究の結果は後世殊に現代に適用せられるにしても辻褄の合はない事になる、要するに此れまでの研究史を顧みるに研究の範圍そのものが歷史的にとらはれ、又あへて埒以外に乘り出して新方面に鋤を入れやうとしたものもなかつた。然らばその研究程度は如何に之は歷史的にきめられたる範圍にても之を徹底するまでに研究しつくして居たかといふに必ずしもさうでない。かの鐘鼎彝器諸銘の研究は舊來の說文學に空前の光彩を放ち、その方面の學者の銳意貢獻せられた功績は實に多としなくてはならぬ。然しまだ少しも科學的綜合的といふ程度には進んで居ない。近時河南省に於ける龜板文の發掘は說文及び鐘鼎文字の研究に希望多き曙光を放つて居るが古來二千年間學者の一度も見なかつた珍品であるだけにその研究が豫期の功果を收めるまでには未だ前途遼遠である。畢竟之までの研究程度は學者の最も多く力を注いだ方面であつたが學問としての或る完成區域に到達して居ない、無論材料の整理さへも充分に出來て居ない。況や其分類秩序の事をやである只材料が漫然と他の目的のために集められ斷片的に解釋されて居ると云ふに過ぎぬ。說文學の白眉と稱せられる淸王筠の釋例(二十卷)同じく段玉裁の說文解字注(十五卷)を見るも思ひ半ばに過ぎるであらう、然し上述龜板文研究は將來餘程囑目すべきである。

**其の二**　斯くの如くその範圍に於て又其の程度に於て二千年の歷史を有する文字研究が今日尙甚だ幼稚であきたらざる處のあるは抑も如何なる理由の存する爲か文字研究史を案ずる者のひとしく疑問となす處である。

漢魏に訓詁の學開け唐宋に注疏の學盛んにして清朝に至り考證の學其の極に達せり。文字學研究の歴史は斯くの如く字學攻覈の便宜多き歴史を以つて飾られて居る、然るに其のいまだ學として範圍程度の頗る狹且つ低なるは裏面に偉大なる妨害束縛の潜伏せるものあるによる。そは何ぞや字學は常に獨立する事なく、漢、唐、清、常に其の他の學問に從屬せしめられ單に方便として研究せられて居た許りである。此の故に文字の研究は童蒙の學と稱せられ經國、濟民治國平天下を事とする有爲の士の關與すべき業にあらずと迄虐待せられ其の消息は字學が古來小學の名を以つて呼ばれて居る一事によるも明白である。即ち小學は古典經書を通解する上の手段に過ぎず已に一通り文字に通曉したる以上は、此れを修むるの必要を認めずとなしたのである。儒者、學者は秦の始皇の時政治上の妨害者と目せられ文字學は儒者學者一般の蔑視する所となつてゐる。字學が其の處を得なかつたわけは故ありといふべきである。文字研究の終局の目的が古典の解釋に資する一點にありたる限りは爭でか其の範圍を擴張し又訓詁注疏の程度以上に蘊奥を極めんとするものあるをもとめ得べけんや。古典に資するもとよりよし、古代バビロニアの楔形の文字又古代埃及のヒエログリフイック文字何れも其の研究は古代文明の闡明に資せんとするにあつた。舊來の支那文字學者が目的とせし處必しも非なりとけなすのではない、然し訓詁の事のみにとらはれて別に文字特有の開拓地面のあるに氣付かなかつた事は研究史上最も遺憾とする所である。

要するに文字學に於て過去の學者の研究した範圍程度研究法を温ぬるは、やがて今後新らしい文字學の範圍程度研究法を知り益々健實に發達せしめる所以である。この故に文字の研究を闡ぶるは、文字學の範圍

内にても一つの重要なる方面を形成するのである。

吾人は文字の本質狀態、規範、研究史の四方面の研究を以つて文字學必須の重要方面となす。文字學が一個の獨立したる學問として、立つ爲めには是非共此の四方面の開拓しなくてはならぬ。尙研究の範圍については他に新方面の開拓を要すべきもの生ずべけれども、上述四方面は飽く迄斯學の中樞たることは動かない。然し苟も文字學が學問としての價値を保ち他の學と相對立して研究の效果をあげて行く爲には單に以上の四方面のみでは足りない點がある。凡そ一個の學問は孤立して存し得るものに非ず、その學の中樞必須の範圍を究めたることのみを以つて、その學の能事盡きたりとなすことは出來ぬ。之と聯關する他の多くの學に直接間接貢獻するところありて、始めて其の實を擧げたとしなくてはならぬ此の見解にして許されるならば、文字學は更に示す所の第五の方面の開拓を以つて其の範圍と認めなければならぬのである。

## (ホ) 學術地位論

### 其の一

これは文字學が他の總ての人文學に對して如何なる影響を與へて居るか。學問界から文字界を假りに取り去る時はあとに如何なる缺陷が生ずるか。かの心理學の如きは總べての精神科學に對して常に規範を與へてゐる所謂規範學 Normative Science である。從てその精神學全體に及ぼす影響貢獻は至大である。これ心理學が精神現象の研究上常に重要な地位を占めて居る所以である、今文字學は如何であるか。その人文學上に於ける地位はどの邊に在るか。どの邊にあるべきか。これは全く斯學研究の成績如何によりて來る。然し從來言語學が印度ゲルマーネンの人文學上に與へた貢獻の至大なりしより推せば研究の範圍方法

努力次第では實に豫測し得べからざるものがある。

言語學は無形の言語其のものを研究對照となし文字學の有形標識を取り扱ふとは其の趣を異にするところありと雖も其の關係は頗る密接である。彼れは主に音を捕へこれは主に形を囚へて研究する、言語は音ありて形なく、文字は形あり又音がある意味の共通に存す事は云ふ迄もなけれども要するに文字には形ある點に於て言語よりも研究の手がゝりが多い筈である、文字を取り扱ふ文字學が言語學よりもより以上の價値を發揮し、より大なる貢献を諸種の學術上になすべきは豫測しがたい事ではない

抑も文字學の學としての所屬は何れの邊にあるかこれが先決問題である。想ふに文字は單に形態(書を含む)音韻のみの立場よりすれば明かに形而下學の領分に這入る、然し輓近人文學界の大潮流に從へば言語研



究が心理學風に解釋せられ居るから、文字學も又心理學上から取り扱はるべき點がすくなくない、或は極端な場合には心理學といふ科學の範圍を超越して神秘的に直覺的に取扱はんければならぬ事も起つて來る、少くとも分解法を棄てゝ綜合法を用ひなくてはならぬ事がある。何れにしても精神現象の範圍として取扱ふべき點が非常にある。この故に文字學は形而上學の領分内にも含まれる事となる。されば畢竟文字學は形而上と形而下との兩範圍に屬する學であると概括せられる。

## 其の二

文字學の所屬が斯くの如く決定せられるならばその所屬の兩範圍に於てそれぞれ地位を有しなくてはならぬ。形而上學の範圍にては文字學は美醜の感情を基礎として研究せられる方面がある故美學即ち審美學の地位を取る事があり又技術として美の表現氣韻の發揚を目的とす

る事ある故美術の領分を侵すことがある。特に美醜の性質法則を研究する科學ではないけれども大體の上より美學又は之に最も近い學の地位にあるものと見られる。自分は文字を美術の一部分と見る持論を有する故この見解を下すのである。心理學に對して文字學は關係は深いに違ひないけれども心理學の如く形而上學に規範を與へるものではない。むしろこの應用の方である。或場合には技術に見られる事もあるが審美的の要素を多くして、美學上より取り扱かはるべき性質が餘程多い、書道の方面にては時々これを普通の理論認識の外に超越したる現象として說かんとするものなきに非らざれども斯くの如く靈妙不可思議なものに說くは餘り極端である。尙形而上の範圍內にて文字學は一般人文學中に主要な地位を占める。他の考古學とか古代文學史とか古代文明史とかの研究と全く同一階級の他位を占める。



文字が美學とか文化史研究とかの格を有することは以上述ぶる如くなるが尙此例によりて之れを說明して見やう。第一文は形本位のもので形の上には書道の上の美もあれば圖案的の美もある。詩賦の上の美もある。形の外に又音の上の美、意味の上の美もある。固より美は絕對的のものに非ずして比較的のものである。形の上は左程善美でなくとも眞なるもの(歷代宸翰乃木將軍筆の如きもの等)は矢張り美とせられる。圖案美の如きも或る聯想のためには美的感情を强くせしむことがある。詩賦に於て字面のよいものを選ぶはこれ明かな事實である。詩が尙形本位であるはどこまでも發揮されて居る。しかし詩の音義の事がその爲に度外視されて居るのではない。次に文字學が文化史研究と同じ格を有して居るといふことは文字發達の初期に於て明かに見えて居る如く字の構造は一々この當時の社會事情風俗人情天然地理等すべて外界

の事が聯想となつて現出して居るに相違ない。上古支那には家に豕豚がつき者であつた故に宀(家屋の義)に豕が書かれたものであるといふ譯で一々この方法で類をわけ系統をしらべて見ると一個の古代文明史といふものが明かになる、歴史や傳説でわからぬことが文字の上で手掛りを得る事が非常に多い。個々の文字はそれぞれ專門家の眼には古代文化を告ぐる單文學の如くに映ずる。歴史さへも及ばぬ事實を字面が告げて居ると云ふ事になれば其れを取扱ふ文字文章は考古學とか人類學とか但しは古代文化史研究とかの妹姉等なることがわかる。文字をその根本材料によつてさへ研究すれば上古その當時の人間が刻みつけた現物によつてその時代事相を窺ひ得る故これ程たしかな文化はない。

文字學の上より歴史的に遡り得る範圍は歴史學のそれより大なるを以て文字學が史學に向つて新材料を供給することがある。然し今別に





言語學をとり來つて之を字學に比する時は、その遡り得る範圍は文字以上である。更に人類學をとつて之を比較する時は言語學以上である故勿論文字學よりも餘程古代に到達し得らるつまり人文の古さを知る點よりいへば人類學、言語學、文字學といふ順序になる、文化史研究上の斯學の地位は以上の如くである故、歴史よりは古く人類史、言語史等よりは新らしい時代の闡明に資する學問なる事がわかる。

次ぎに形而下學としての地位は加何、こは先にも述べた通り字の形態と音韻とが直接形而下學に屬する部分を有するによりその地位を考ふる必要であるのである。字に形態を具備するはその第一重要條件である。形態のことたる天地山川日月動植物工藝品身體等あらゆる具體的のものゝ連想によつて表はされて居る。森羅萬象の物質界の事が太古上古中古、近世現代と常に字面に表はされて居る、文字學中形態研究の

大部門が設けられたるならばその刻せられて書せられたものは即ち形而下に屬するものとなる。その心理現象として說かれる方面があるにせよ形態そのものは、地理なり動植物なり生理なり又技術なりの方面から取り扱ふ可きである文字の精神的の方面と物質的の方面とは劃然たる區別が存する。また字に音韻を具備するはその第二の重要條件である音韻の事たる最近實驗心理學の取り扱ふ如く總べての音韻現象を精神作用の表現なりとなす時は、音韻は形而上學の領分に屬する感なきに非ざれとも、實は然らず。音響そのもの及びその音響即ちSounde Voice其の發する徑路並びに發音機關の方面に關する點は物理學と生理學とに屬さなくてはならぬ。文の字をブンとも讀みモンともよむは鼻腔に氣流を通ずると通せざるとの生理的區別がある外に音響としての物理的區別もある。以上の理由により文字の形態音韻の兩者は形而下の領分に這入る、字の意味は主として心理現象中その概念論にて說明せらるべきものなれば勿論他の二者とは同等に論せられぬ。尙技術の方面の書き方歌ひ方などは形而上と形而下との兩方に這入る。要するに文字の形而下學內に於ける地位は自然科學 natural science の大部分に跨る。蓋し文字はもと森羅萬象に逐一象れるものであるからである。尙技術上にて形而下の處ありといふは用具並に機關の繰り方如何に在るを指して云つたものである。

## 其の三

總體の上より文字學の學術上の地位は審美學、文化史研究、歷史、言語學自然科學地理學動植物(物理學、生理學等)等の間に在り、否これ等諸學の一部分宛をとりて一團となした如き學問である精密に云へば尙考古學とか、古文書學、金石文字學、傳說史、埃及學等あらゆる人文學と自然科學とを

含む一個の學である決して人文、自然の何れか一方に偏してしまふべきものではない是に於て文字學は一個の學として獨立した價値を占めざるを得ぬ事となる、今かりに歴史の一部分に過ぎぬものとせんか文字の本質狀態規範等の大部門は果して歴史の立場から十分に研究が出來るかどうか。又若し單に審美學の一部分として其れに入れられんか、史的方面、本質論、變態文字等の大部門は勢ひすてなくてはならぬことゝなる。到底他に隷屬して居ては新らしい文字學の建設は望みにくい。他の學の方便のみで了へるならば兎に角苟も自分の主張せんとする文字學の學としての目的任務を果たさんが爲には是非とも他の從來の學と同じく一價の獨立した地位を確保しなければならぬ。これ茲に文字學の範圍中最も其大なる事項として最後に之を論じた所以である。

文字學の研究範圍即ち部門は以上叙述したやうな(一)本質論、(二)狀態論、(三)規範論、(四)研究史論、(五)學術地位論の五大部門でその分野の重要なるものを總括し得る。たとひ尙新分野の發見せらるるものありといへども此れ等諸部門の孰れにか屬せしむることが出來る。例へば新發掘事業とゝもに新形態のもの出でたりとせむか本質論中に或は又研究史論中現時の部に述ぶることが出來る。又雲南貴洲方面より讀むべからざる奇態文字の碑が發見せられたとすれば狀態論中で說明せられる。又た文字敎育の研究のことは狀態論、規範論の部で講せられる。要するに文字が如何なるものであるか如何にあるか、如何にあるべきか、如何に研究されて來たか及び此の四方面の研究でなつた學問＝文字學は諸種の學術に對し如何なる地位を持つかといふ。當初擧げおきたる諸事項は說明し終へた。畢竟本節で說いた文字學の範圍は文字で取り扱ふべき分野の事と他の學との交涉關係の事の兩方を究むる必要がある事を明ら

かにしたのである。

## (四) 文字學の任務

### 其の一

文字學の任務の應用方面は時代と社會及び土地の異なるに伴ひ任務は劃一なるを得ぬ。舊來の文字が時世に適合しなくなつた場合の如き學術上からは何とか適當な畫策を立てなくてはならぬ。原則としての筋道は一定であり得ても、任務は時と場合次第で變化動搖あるを免れぬ。然し學術方面では常に一定不動である。時世の推移によつて任務に動搖がある筈はない。

文字學の學術上の任務の第一は斯學の基礎を益々鞏固にするを期する事である。學問の定義と範圍とがきまればどこ迄も學術上の任務を果して行く、決して學の範圍内に好惡疎密の癖があつてはならぬ。文字



學の取り扱ふ文字の意味は甚だひろい。深遠な學理に到達せんとするには、卑近なるを斥けず、大海細流を擇ばずの主義で行かなくてはならぬ。學者專門家の文字古人の書に非ざれば斯學の對象物に非ずとなす如きは最も嫌ふべき事である。盲人の書、兒童の文字、低能兒の書、アイヌの書生蕃の手蹟、西人の書き振り、一つとして深遠な學理の資料とならぬ者はない。殊に文字の心理を調べんとする時などには、毛の字とモの字の混同トの字と亻(左文)の字の正誤など不期の好材料となることがある。又出入り商人の中元歳暮の贈品、團扇、手富貴に見られる低級なる俗字形など意外の意匠になれるものがある。取るに足らぬものの如くにして決して然らず。月や花のみが歌人の詩題に非ざる如く、古筆芳墨のみが又文字學の對象ではないのである。變態とか、應用とかの方面までもふくむ事とすれば苟も文字として表はれたるものは鐵道旅行に見る「ゼム」仁

丹の廣告字なんかも亦材料でないとは云へぬ、事極端の例なりと雖も文字が從來あまりに狹きに失した反動として茲に十分に廣く採用せんとするのである。恰も言語學の對象たる言語に印度や、希臘、羅馬の古典のみを崇めず、一孤島の農夫漁人の訛言迄も尙能く眞理の發揚に資することあるより、すべて採つて材料となすと一般である。

材料の範圍をなる丈け廣くするは學の基礎を鞏固ならしむる一要素である。次ぎには學としての組織がよろしきを得ねばならぬ、如何に多くの材料を取り扱ふもその體系の建てかたが法を失する時は基礎を危くするばかりである。學の範圍部門を定めて、之に秩序をたて一が他を侵すなく、各その部分々々の綱要を拉し來たつて大綱小目條理整然以つて一個の學としてのピラミット塔を建設するに在る。字形遡源のことのみが文字學でなければ、又字義の解釋のみが文字學でもない。又音韻



の調査のみが文字學でもない。此等は文字要素の三方面を指したるに過ぎぬ三方面の研究相鼎立して始めて要素の完全な研究を期待し得るわけである。形の方面にては起源、構造、變化、現狀といふものを秩序正しく觀察して調べる必要がある。そのうち一小目を忘却しても學問として成立しがたいことになる。要は本質論を形成するが一番肝腎。その他この學の範圍にて取り扱ふ可き問題項目の多くある事は前に敍述しておいた通りである。その範圍に屬するものをよく秩序的に組織する事は、學の基礎を鞏固ならしむる又一要素でなくてはならぬ。材料の豐富なると組織の科學的なるとは學としての根本基礎を確立するに最も緊要事である、泰西言語學の如きも第十八世紀より第十九世紀の中葉に至る約百年間に材料と組織とに於て學としての基礎を確保することが出來た。これは文字學の場合に以て參考となすべきものである。

然し文字學では材料と組織の外に研究方法に就いて最も重きをおく必要がある。これは他の學の關係上より主に促される。即ち他の學の要求によつて研究の推移するは免れぬ。他の學の研究推移によつて、斯學の研究法を變更する必要の生ずる事もある。言語學の最近研究法なども獨逸ヴント派の心理研究の影響を受けて、舊來の言語學的取扱方の面目を一新した。之は學界の機運である。文字學の場合も同じ事が豫期せられる。然し外部の影響の事よりも斯學は斯學としての研究法なるものが最近一般文化學の研究法より類推して確保せられんければならぬ。既に組織が立つと同時に研究の方向は畫策される。例へば補助學科として考古學、人類學、言語學、史學、地理學、美學、心理學等直接關係の深い學問を採用すべき事は、當然明白な事である。最近に自分は動物形態學の必要なことも痛切に感ずるに至つた。このことは後に述べる。

又これ等の補助學を如何に適用して研究に資するかといふ方法上の問題もある。されば內容組織を活かすと殺すとは此の研究法の如何によつて決せられるといふも過言ではない。研究法の宜しきに叶ふは斯學の基礎を益々確實にする所以である。

## 其の二

文字學がその任務を數ふるにその學問自身の基礎に就き述ぶるは普通の任務の說き方と異なる所である。最近の科學人類地理學 Anthrogeography の如きその學の任務を說くにその學の基礎を固めることと、その學の効果との兩方を說いて居る。これはさもあるべきことである。しかしながら又飜つて考へて見ると、任務論の要は他の人文諸學又は自然科學に貢献すべき點に就き述ぶるを眼目となすべきであらうけれども對外關係は先づ斯學自身の基礎を固め內容を健實にするに在ると思ふ。

基礎の確保のみで終つてしまへば任務の實を盡したものといへぬ先づ順序として基礎論を云々するに在る。今始めて興らんとする文字學はその基礎に就き大半の任務を果たさんければならぬ、基礎成るの後、上述補助學は勿論諸學に對して貢献する所あるを旨とする。例へば上代建築關係文字を組織的に調査して支那上代の建築の樣式構造並びに細部のもの等その形に關する上古漢人の意匠がよく判る。又率いてはその建築の型を限定する所の他の條件即ち、地理、岩石、土壤、植物(木材に關して)の狀態のことも推測せらるゝに至るわけである。京の字の古形、高の字の起源などの如きその屋蓋が二流れの作りで、軒端が長く垂れてゐた態より考ふれば、木材の豊富であつたことは明白なる事であると云ひうる。又政治上の方面にては君とか尹とか又司とかの構造によつて上代の政治思想のこともよくわかる。曾に上代文化の研究に資するのみならず

現代の文字の整理活字の統一等の如き、或は漢字の教授法改良の如き、重要なる實際問題に爲つても、其解決の有力なる標準は文字學上の立脚地から案出せられなければならぬ。或は變態文字の調査より、字面に現はれたる國民の心理狀態、個人心理、又殊に兒童等の心理をうかがふことも出來る。實驗心理學の研究がこれまで文字方面に十分這入つて來てゐないのは文字學上からその連絡をつけてゐなかつた爲めと云つてもよろしい或は又日本の國語の歷史と漢字の關係も、中々入り込みたる現象がある。漢字が國語に與へた影響弊害等のことを歷史的に調査するも文字上學の任務である。

文字學が他の諸學に與ふる影響は甚だ多くして決して以上に述べたもので盡したのではない。又實際問題を決定し文字を文字としての完全な發達をとげさせて行く爲めには、文字學なる鞏固なる基礎の上に論

を立て企圖されんければ本當でない。從來は唯識者の卓見又は常識で解決せんとしてゐたのみである。學問としての考から割り出したものでない。文字の進歩發達の歴史を極めることなくして、現代の文字說に非進歩的のドグマを强ひんとする如きは甚だ受取れない。凡そ文字學はすべて文字にて書かる。すべての文獻學 Philology は此の字學によつて新たに開拓せらるべき餘地がある。或は再び開拓し直すべき分野がある。また現代の藝術界に就ても文字の應用によりて、一生面を開くべき望みがある。圖案、繪畫なども今一層意味深く發達させることが出來る。從來此の方面が全く忘れられ否試みられなかつたのである。



## 三十一　應用文字學の範圍を論ず

應用文字學とは文字學の一大部門であつて、文字を學術、技藝等に應用する學の謂である。文字が文字としての實際の價値を發揮するは此應用方面にある。之を學問とするは既に個々の應用せられた現象がある に因る。唯之を歸納的に又綜合的に幾分か組織を立ることを以て斯學の任務となすのである。

抑もひろく文字を取扱ふ所の文字學なるものは、未だ東洋は勿論西洋に於ても設けられて居ない。けれども文運の進歩は斯學の建設を催さずには居らぬ。自分は文字學なるものゝ建設が認めらるゝ時には文字學とは、文字を科學的に又藝術的に取扱ふ學なりと定義すれば、その內容の示す概念の範圍を限ることが出來ると思ふ。而して此の文字學の取扱ふべき研究には自ら研究の便宜上諸種の部門を設けておく必要があ

る。今その大綱目のみを示すならば大略左の五大部門となる。即ち、

文字學の部門

第一、文字實質論(即ち形、音、義に關するもの)

第二、比較文字學(支那文字と諸外國文字の比較研究)

第三、應用文字學、

第四、變態文字學

第五、文字學史

である。今本章にはこれから諸部門の取扱ふ事項に就いて詳述するの暇はないが、文字なるものを新しい研究法で研鑽して行かうとするには此の五方面は看過すべからざる部門である。殊に日本の國字(即ち漢字と假名とを指す)の研究には豫め此の方面に分けて考へることが必要である。而して此の文字學が今日以後の學界に於いて新生面を開き學術上の影響を他に與へるやうになる爲めには、補助學として、考古學、歴史學、言語學、音韻學、心理學、古文書學、訓詁學、傳説史、美術、埃及學、歌學などの諸學を始め文房具、簡、帛、紙の沿革のことも極める必要がある。文字の研究が學問として立つ爲めにはかくの如き方針で進むべきでないかと考へる。

呉大澂、阮元、劉心源、孫詒讓を始め清代の金石學の泰斗の研究せしところ、また段玉裁、王紹蘭、王筠、朱駿聲を始め清代の説文學の泰斗の闡明せし方面のこと等は固より文字學中の重要な位置を占めて居るに相違ない。

けれどもその研究の目的、範圍、方法、結果よりすれば、必ずしも完璧となすことは出來ぬ。否、その功蹟を多とすると同時に又今日の研究の立場より大いに長短相補ふべきところがある。能ふべくんば別に根本的に、目的、範圍、方法を改めて、見たら如何かと思はれるところもある。されば、説文學、金石文の學などは文字實質論中變遷史の部に這入るに過ぎぬ。文

字學は、より大なる任務を有し、從つてその方法に於てもよほど適切な方法をとる必要があるのである。字學の目的が單に古典經書の解に資するを以て唯一の目的となす時は、從來の方法以上に、大なる改良を必要としなくともよいかも知れぬ。しかし文字學は今後は、上述の如き少なくとも五大部門を有するものなるを以つて、よほど文字學の學なる概念を明にし、且つ概念の範圍を大きく豫めきめておく必要があるのである。

文字學の概念がかやうなものであるとすれば、その一部門なる應用文字なるものゝ範圍は如何。言語學に於いて言語の應用方面は、その學の成立に先立ちて存して居た。インドゲルマン語の文法、音韻の研究完成以前既に印度リグ・ヴエダの古典研究が開かれて居た。即ち文獻學的にPhilologischeに試みられてゐた、マクスミユーラー博士は此の點に於て沒すべからざるオーソリテーである。又言語學完成後に於いても佛蘭西の劇場に於ける所謂聲色の研究のごとき頗る斯學上注目すべきものがある。文字學の方面に於ては言語學の應用方面と全然同一のことを希望することは出來ぬ。けれども、文字は文字として特色を具備するが爲めに、却つてその美術的方面にまでも貢獻するところが至つて大である。苟も文字の應用方面のことは啻に美術方面と限らず、あらゆる方面に文字の應用せられた事項を悉く網羅し盡すを要する。

應用文字學は他の部門なる文字實質論とか、比較文字學とか、又變態文字學とかのやうに、純學術的の方面のみに偏するものではない。たとひ學術の一方に偏しても、唯一個の學問に限られることなく諸學に融通して頗るその連絡のつく所が多い。學術以外に關係のつく場合を考へて見ると、美術方面、教育方面、遊戯方面などがその主なるものである。此れ丈でその全部を網羅したものとは云へないが、之によつて大體は含蓄せ

られて居ると思ふ。今左にその學術方面なると否とを問はず、應用の諸部門を列擧して之に説明を加へて見よう。

（一）文字美術

茲には印刷上手數を要する爲め一々文字美術の實例を掲げることは出來ぬが、文字を美化して美術的に用ひたものは古來甚だその例が多い。支那にも日本にも又西洋にもある。獨乙に於ては建築工藝品などに Schriften Atlas の應用甚だ盛にして僅か二十六文字の Alphabets を忍冬唐草諸種の植物性模樣その他に美化し、修飾を加へて居るものがある。園藝などにも花卉を或はS或はN形などに植込みたるがある。日本にても建築では、亞字欄に亞の字を應用せるを始めとして、陶卓子に雙喜を抽き、しるし紐繩に角字を書き、煎茶茶碗に繪畫的書體の文字を燒き付け、その他織物類には模樣圖案に調和したるやうに染付られてある。又一幅の卷軸に於ても畫賛には畫の調子に一致した文字が書せられて居る。或は全然畫のない書幅に於ても百福百壽の如き異體文字をそへるとか亢龍乘雲的の文字が筆太く揮はれたるなど、何れもすべて美術である、又美術的である、文字及び書は美術の範圍以外のものとして別に取扱ふべきものとなすものあれども自分はとらない。書も亦たしかに、美術に入れる資格があるといふ。文字を圖案化するとか、美術的に書くと云ふことはたしかに技術を要する。しかしあまりに技工を要して不自然なるは字に生氣を缺く所以なれば、貴ばれない。とにかく文字を美術的にかくとか圖案化すると云ふことは、文字の應用方面中大なる役目である。碑文とか印章とか看板とか又短冊色紙とか一として之に文字が美術的たることを不要となすものはあるまい。他に歴史的の來歴由緒によつて物の貴さの増すことは固よりこれあり、されども美術的に美なるもの

なれば尙更貴しとしなくてはならぬ。

## (二) 文字遊戯

文字を遊戯の爲めに工夫して色々應用したものがある。例へば多少智識教育の目的にもなつてゐるが所謂「字さがし」のある繪本(赤本、黃表紙)又文字そのものを一筆畫のやうに書いて字と繪とを兼ねさせたものがある。「乃」の字の草書體から達磨を作り、「の」の字から蛤の形を作るなどその例である。その他大道などにて見る松竹梅の三字を曲書きして同時に松より松の樹竹より竹枝、梅より梅樹の花を畫くの風あるは人の知る所である。又カルタ、歌牌に應用して特にその首字に注目せしむるやう仕組まれたものもある。又た混同しやすい文字字體の記憶しにくいものなどを、五七の調の歌に作りなどして、童蒙の便にそなへたものもある。すべて文字を遊戯又は準遊戯的に使用せられたものは此の部類に這入



るのである。

## (三) 文字傳說

これは文字に關する傳說と迷信とを併せ意味するものである。文字の創造に就いての傳說、文字を絕對に大切にすると云ふ考、又個々の文字にあつては、天子の名字を憚りて避けたり又闕畫したりすること、又地名人名の文字より起つた傳說迷信、或はまじなひに關する文字の迷信。即ち小兒のはしかの病氣除けには馬の字三つ書いて門前に貼れば、よいとか、眼病者は札に「め」の字を四十七文字書いて地藏に奉納すれば願が達せられるとか、又小兒を笑はせる爲めにとて竹籠を犬の貼子に被らせて例のイヌハリコを作るとか、黃金萬兩を續け書きして金櫃に記するとかその外菅原道實に關する文字傳說、又氏族繼承の名前に關する傳說、國號文字傳說など擧げ來たらば甚だその種類が多い支那で文字は鳥の足迹を

見て作られた云々などのことも所謂傳說であつて事實とは思はれない。傳說は上代にも後世にもある、同樣に迷信も亦古今を通じてある。すべてかやうな方面のことの研究は一つの此の應用文字學中の一項目となるのである。

## (四) 文字敎育

應用文字學のうちで此の項目ほど實際上に必要缺くべからざるものはない。第一敎育上に必要な文字と、それ程必要でない文字との兩者がある。その敎育上に必要なものは何千字を以て不足なきものと定むべきか。又その字の書とか音とかは敎育上如何なる程度に止めておいてよろしきや。又敎育上許容すべき通用字形、字音の範圍のきめかた。これは敎育上最も大切な事項の一つである。誤字誤音は勿論非とすべきであるが、さりとて、餘りに、古法に嚴密に符合するやうなもののみを覺えたところで實用に適しない。實際、實用になる文字は多く通用形である。又通用音である。それでまに合つて行くのである。又それが時代を代表する文字として認めらるべきものである。輸(シユ)をユと讀み、術(シユツ)をジユツと讀む位のことは今日の時代音として敎育上認めなくては今日の敎育と云へぬ。すべて專門の學問を離れて單に敎育と云へる立場のみから文字敎育の案を立て、その目的に叶ふ方法が制定せらるべきである。既に各文字の敎育的標準なるものが立てば、從つて之に準據したる標準字典の編纂が必要である。中等敎科書には普通文字の四千乃至五千のものが見えて居るがその各個の形、音、義に關する標準は示されてない。これは文字敎育に於ける現下の最大缺陷にして、是非共早くその準據するに足るべきものを示す必要がある。現時小學校及び中等敎育程度の敎師にして漢字に就き自信ある概念を以つて敎授せるもの少

なきを見ても如何にその時宜に適した事項であるかゞわかるのである。

從來教育のことたる多くその範を泰西の諸文明國に採る。各學科の教授のことに於ても亦然りであつた。然るに獨り漢字の教授のことに至つては一般に西洋の教育に於いて見出し得ない。その爲めか、あらぬか漢字の教授に就いては未だ他の教授要目の設けられたるに似ず、尙未だ幼稚であつて、新しい方案なるものが立つて居ない文字の教育的應用方面の問題として此のことは猛省すべき點である。多讀によつて慣らせるの方法固より惡しきに非ざるも、今少しく秩序的に別に漢字の教授法を考へる必要がありはしないかと思ふ。

## (五) 活　字

活字と云へば今では明朝體のものと云ふ考のみが先づ、あたまに浮ぶが、文字が社會の各方面に現はれるに當つて、その最も普通に、又最も多く



現はれる形態は此の明朝活字である。實際明朝活字體の社會に擴がつてゐる有樣は盛なものである。文字が印刷上に現はれる時は殆んど大半は此の活字で現はれるのである。活字は一方から云へば社會に對して文字教育の要具となつて居る。殊に、ルビー付きの活字に於いて然りである。

活字を以て應用文字學の一部門にしたわけは此の活字の流布力の偉大な點に存するのである。過去は、とにかく將來は文字の時代的特色を決定するものは此の活字がその一つとなるに相違ない。固より他に手書體の文字のこともある。けれども手書體は銘々の手で書くことの爲めに體に一定の型がない。之に反して活字には一定の典型があり、その典型を變更することなくして、流布するの點に於て活字には偉大な力が認められる。而して此の活字の典型は即ち鑄造の字母である。字母に

現代は現代の字形、字畫を鑄込むことが、最も時代の代表的文字を示すことゝなるのである。社會に最も勢力あり流布力あるものにして文字の目的を最もよく果して居るものが活字であるならば、活字を出來得る限り時代文字の代表物たらしむることは無論肝腎である。活字は、(popular characters の數を示し、種類を示し、字畫を示し、又需用の度數 frequenties (利字であると否とを現はすに足る)を示して居る。更にもしその活字材料の品質よりして時代の經濟狀態をも推測が出來るならば、又副產物的に他の研究の資料ともなる。單に文字そのものにして見ても日本全國は素より朝鮮、支那あたりまで多くは日本の活字が流布されて居るのであるから、活字を利用して文字學上の研究を實現せしむるは事實求是の要に叶つた方法であると思ふ。字形が簡單化して實際の役に立つ方へとのみ進化して行きつゝあることが過去の歷史的研究によつてわ



かる以上は、現代の文字とても必しも說文に泥まず、古典に拘泥するなく時代の要求に從つて簡單なるものを選びて(妄りに決定するは固より非なるべきも)之を一々活字に適用すると云ふ風にあるべきである。殊に標準字の制定には活字の上に就き十分のしらべをしなくてはならぬ。

以上は明朝活字に就いて主として述べたのであるが、尙淸朝とかゴヂック體とかアンチック體とか又角丸ゴヂック體とかにも亦同じことが適用せらるべきである。但しゴヂック體の活字は線が大なる爲め畫數の多いものに在りては、一々ふとい線 dark line を用ひて居るわけにいかぬ。轟の字とか轤の字とかは之をゴヂック體にすると縱橫の線が融合してしまつてわからなくなる。この種の活字には特別の攷案を要することであらう。とにかく文字學を應用して活字をして一層意義あるものたらしむるは、文字學の立ち場より云つて重要な問題であると思ふ。

## (六) 文字文化史

上代の文化の迹を探くるには藝術遺蹟によつてすることも出來れば言語の古形を辿ることによつても出來る。又制度とか風俗習慣とかの初期のものに遡つてしらべて見ることによつても出來る。その他古代の文獻中に散見する上代の思想より推測することも勿論出來る。しかし茲に文字文化史と掲げた理由は文字の上古の形式構造より攻究してその分解、結合により、上代の文化全般を窺ふと云ふことを主眼となすのである。

文字と上代文化との關係は甚だ密接である支那は言語の形式が單綴語本位である。尠くも單綴語的なるを以つて、言語の形式から古代の文化をさぐることは甚だむづかしい。殊に言語として必要な上代の音韻綴音を明にしがたい爲め、インドゲルマーネンやサンスクリット乃至は朝鮮語、日本語などに於ける如く音語そのものから這入つて行くことは出來ぬ。出來ても非常な困難に出會ひそして斷定の出來ぬことが多い。然るに文字によるときはその困難は比較的に除かれる。各文字の構造を歴史的に又歸納的にしらべる時は大體上代の文化史がわかる。所謂文字上からして文化の歴史 Kultur-geschichte が築き上げられると信ずる。時としては極めて古い時代の思想までが文字上に遺つてゐることもわかる。

例へば支那人が太古中原に於て大森林にすむ猛獸からの加害を恐れてゐたことが字面に現はれてゐる。即ち「虞」の字に就いて之を見んか。說文には、虞は詩經に於ける如く騶虞と熟して見ゆ（白虎黑文、尾於身、仁獸）されども單獨の虞の字の解はない。しかし詩經抑篇に「戒不虞」と用ひてゐるこは慮の義なり、廣雅に虞は驚也と解く、虞の字が、慮とか驚とかの意味に用ひら

れたるは全くその造字の要素に本來關係があるからではあるまいか。説文にはたゞ虞は從虎吳聲となせるも、その實鐘鼎古文に在りては、長尾の虎と人の象形と口との三要素である。その吳の字をなす大の字(人の意)は大の字に似てその頭を少しく左方に傾けたるもの即ち天の字の古字に近き形をなす(木版省略)口は叫ぶの意。恐らく吳の字は人の驚き叫ぶの意を寓せるに似たり。吳の字金文には大と口とに從ふ、説文に大言也とあり。とにかく叫ぶの意、而して虞は虎と叫との合意なれば上古の支那人が猛獸に襲はれ居たりし當時のことが此れで察せられる。猛獸と太古住民との接觸は必しも文字のみに現はれたるに非ざるも文字上にかやうに明に見られるのは珍とすべきである。孟子滕文公に、堯の時蛇龍(爬蟲)類の出てゐた傳説が見えて居る。蟲類獸類の人文に關係あることは云ふを要せぬ。易の如きもその初め蜥蜴の如きものであつて、キ

ヤメリオンの皮膚の色素の變ずるごとく變ずることの妙なるより所謂易の原義を胚胎せしめて居ることがわかる。又問題はちがふが上代の塞墓の樣式は如何であつたか穴居は縱穴には如何なるものがありしか横穴の狀態は如何。又た祭祀の時には机器は如何なる物が用ひられてゐたかまた治者は如何なるものを以てシンボルとなして居たか有司、吏官なるものゝ起源はどうであつたか、政治法律の始めの形式は如何等の諸點より、人名地名等には如何なるものが最も多く好まれて附けられて居たかと云ふやうな思想上のこと、天とか神とかに對する象形の意匠のこと、また、行政區劃の起り始めは如何なることより始まつてゐるか――處刑場が村落の中心となり、變遷に變遷を重ねて遂に後の縣の意味となつたのであるとか云ふやうな沿革の始めの狀態が縣の字の古形を解剖することによつて明にせられる。

要するに普通の文獻にて到達することの出來ぬ上古の元始的な狀態はよく字面に窺ふことが出來る。唯個々のものを個々のものとせずして歸納的に研究し來たる時は、上代の各般の文化を明にするを得て、從來の東洋史、考古學に一生面を開くことが出來ると信ずる、殊に近來は河南省發掘の龜甲獸骨文字なる新材料が出て來た。これらによれば上代文化史はよほど研究の手掛りを得るわけである。文字學は文字そのものゝ實體本質を明にした上でかやうな文化史研究に應用することは、これ亦文字學上の一大緊要の事である。從來はたゞ文字の學とは經書の解を補ひ明にするのみを目的としてゐたのであるが今後は更に文字そのものを基として一つの太古又は上代文化の歴史が考古學的に建設せられはしないかと思ふのである。

以上に論じ述べた應用文字學の六方面は從來必しも全く等閑に附せられて居たもののみではない。しかこれをまとめて文字學中の一大部門となし之を他の比較文字學、變體文字等と相ならべてそれ〳〵研究の歩武を進め以つて新しい意味に於ける所謂文字學なるものをして單に文字の形、音、義の要素の研究のみに止めず、十分に實益のあるそして他の諸學及び藝術、教育、遊戯等の研究にも稗益を與ふることの出來る學科に仕立てたいと切に希ふ次第である。此の點に於て日本の漢字を根本的に色々の方面から研究するは最も文字學の建設に資する上便宜の多きものと思惟する。

後藤朝太郎氏著述（摘錄）

文字の研究　東京成美堂……（四五〇）
文字の沿革　東京成美堂……（一三〇）
現代支那語學　東京博文館……（五五）
明治の漢字　東京寶文館……（一五〇）
言語學（金澤博士合著）　東京博文館……（九〇）
漢字音の系統　東京六合館……（一二〇）
支那文化の解剖　東京大阪屋號……（三五〇）
支那料理の前に　東京大阪屋號……（一八〇）
支那の風俗　東京大阪屋號……（二〇〇）
支那趣味の話　東京大阪屋號……（二二〇）
長城の彼方へ　東京大阪屋號……（八〇）



大正十五年五月五日印刷
大正十五年五月十日發行

文字の沿革奥附
定價金四圓

著作者　後藤朝太郎
印刷兼發行者　丸野定一郎

發行所　東京市神田區三崎町　日本大學
發賣所　東京市神田區三崎町三ノ一四九　巖翠堂書店　振替東京七四二〇二
發賣所　東京市神田區表神保町三　粟田書店　振替東京四二八一〇

印刷所　下谷區二長町五十一　前田印刷所

終